

福井県埋蔵文化財調査報告 第178集

寄安・栗森遺跡 2

— 北陸新幹線建設に伴う調査 7 —

— 一般県道福井森田丸岡線道路改良工事に伴う調査 2 —

2 0 2 2

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告 第178集

寄安・栗森遺跡 2

— 北陸新幹線建設に伴う調査 7 —

— 一般県道福井森田丸岡線道路改良工事に伴う調査 2 —

2 0 2 2

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

このたび、北陸新幹線建設事業及び一般県道福井森田丸岡線道路改良工事に伴って、坂井市春江町寄安において平成28年度に実施しました、寄安・栗森遺跡の発掘調査成果がまとまり、報告書を刊行することとなりました。

寄安・栗森遺跡は坂井平野の南部に位置し、磯部川左岸の自然堤防上に立地します。

今回の発掘調査では弥生時代後期末の遺構・遺物も検出しましたが、主に鎌倉時代後期と室町時代前期に営まれた集落遺跡であることが判明し、多くの貴重な成果が得られました。

遺構は、掘立柱建物、溝、井戸、土坑、ピット等を多数検出しました。掘立柱建物等が調査区の中央から西側でまとまり、溝や井戸、土坑等は建物がまとまる範囲の周辺で多く検出しました。中世の二時期が重複しますが、遺構の分布状況からみて、溝で方形状に区画して一面に建物群、周辺には井戸や土坑等を構築する屋敷地の構造が明瞭に窺えます。また、遺物は中世の土師質皿や越前焼等の土器・陶磁器が中心ですが、木製品の漆器碗や曲物等も出土しています。

今後、本書が各方面で広く公開・活用され、埋蔵文化財に対するご理解を深める機会になるとともに、地域の歴史研究の進展に寄与できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大なご支援とご協力を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。

令和4年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 中 川 佳 三

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが北陸新幹線建設事業及び一般県道福井森田丸岡線道路改良工事に伴い、平成28年度に実施した吉安・栗森遺跡（福井県坂井市春江町吉安及び福井市栗森町所在）の発掘調査報告書である。
- 2 吉安・栗森遺跡の調査は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構及び福井県三国土木事務所の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、田中勝之・望月麻佑が担当した。
- 3 発掘調査の支援業務は、国際文化財株式会社にて委託した。
- 4 発掘調査は、平成28年9月1日から12月28日まで実施した。出土遺物の整理作業は、平成30年4月2日から令和4年3月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 5 本書の編集は青木隆佳があたり、田中・赤澤徳明が分担して執筆した。執筆の分担は以下の通りである。
田中 第1章、第2章、第3章、第4章
赤澤 第5章
- 6 吉安・栗森遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 7 遺構と遺物の図化・写真図版作成は各執筆分担者が、写真撮影は田中が主に行った。
- 8 本書に掲載した遺構図は、国際文化財株式会社に委託して作成したものを一部改変して使用した。
- 9 本書における水平レベルの表示は海拔高（m）を示し、方位は主に座標北を用いた。また、X・Y座標値は、国土方眼座標系第VI系に基づく。
- 10 本書における遺構の略記号は、以下の通りである。
SA（権列）、SB（掘立柱建物）、SD（溝）、SE（井戸）、SK（土坑）、SP（柱穴・小穴）
- 11 本書における遺物の観察表は、土器類の胎土を便宜上4つに分類している。
①径1mm以下の砂粒を少量含む。 ②径1mm以下の砂粒を多量含む。
③径1～2mmの砂粒を含む。 ④径2mm以上の砂粒を含む。
- 12 本書における挿図の縮尺は個々に添付しており、写真の縮尺は不同である。
- 13 木製品11点は、株式会社文化財サービスに委託して保存処理と樹種同定を行った。
- 14 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 15 発掘調査に際しては、次の方々および機関のご協力を得た。
坂井市春江町吉安地区
- 16 発掘調査には、地元の方々の参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター整理・普及グループ職員および整理作業員が当たった。

目 次

第1章	調査の経緯	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	1
第2章	遺跡の地理的・歴史的環境	3
第1節	地理的環境	3
第2節	歴史的環境	4
第3章	概要	7
第4章	遺構	9
第1節	掘立柱建物	9
第2節	柵列	11
第3節	溝	11
第4節	井戸	16
第5節	土坑・ピット	21
第5章	遺物	31
第1節	古式土師器	31
第2節	中世の土器・陶磁器	38
第3節	土製品	45
第4節	石製品	45
第5節	木製品	49
第6節	金属製品・銭貨	54
第7節	遺構外出土の土器	55
第6章	まとめ	60

写真図版目次

図版第1	遺跡 (1) 調査区北半全景	(2) SB02・03
	(2) 調査区北半全景	図版第4 遺構 (1) SB04
図版第2	遺跡 (1) 調査区南半全景	(2) SA01
	(2) 調査区東端全景	(3) SD01
	(3) 調査区中央全景	(4) SD02・05
図版第3	遺構 (1) SB01	(5) SD06

	(6) SD08 遺物出土状況		(4) SE24 井戸側③と礎検出状況
	(7) SD08		(5) SE24 井戸側④
	(8) SD09		(6) SE24 井戸側基礎の確認状況
図版第5 遺構	(1) SE01		(7) SE24 井戸側基礎の半裁状況
	(2) SE02		(8) SE24
	(3) SE03	図版第10 遺構	(1) SK01
	(4) SE04		(2) SK02
	(5) SE05 井戸側		(3) SK03
	(6) SE05		(4) SK04
	(7) SE06		(5) SK06
	(8) SE07		(6) SK07
図版第6 遺構	(1) SE08 井戸側		(7) SK08
	(2) SE08		(8) SK09
	(3) SE09 井戸側と集石	図版第11 遺構	(1) SK10
	(4) SE09 井戸側		(2) SK11
	(5) SE09		(3) SK13 遺物出土状況
図版第7 遺構	(1) SE10 井戸側①		(4) SK14・15
	(2) SE10 井戸側②		(5) SB01 P01
	(3) SE10		(6) SB01 P13
	(4) SE11		(7) SB02 P02
	(5) SE12～14		(8) SB02 P08
	(6) SE15	図版第12 遺構	(1) SB02 P12
	(7) SE16 井戸側		(2) SB02 P20
	(8) SE16		(3) SB03 P16
図版第8 遺構	(1) SE17		(4) SP242 遺物出土状況
	(2) SE18		(5) SP248
	(3) SE19		(6) SP384
	(4) SE20		(7) SP647
	(5) SE21		(8) SP833
	(6) SE22	図版第13 遺物	
	(7) SE23 井戸側	図版第14 遺物	
	(8) SE23 遺物出土状況	図版第15 遺物	
図版第9 遺構	(1) SE24 半裁と遺物出土状況	図版第16 遺物	
	(2) SE24 井戸側①	図版第17 遺物	
	(3) SE24 井戸側②	図版第18 遺物	

挿図目次

第1図 遺跡と調査区的位置図	1	第3図 遺跡周辺の地形分類図	3
第2図 調査区のグリッド配置図	2	第4図 周辺の遺跡分布図	5

第5図	基本層序	7	第28図	井戸・土坑出土古式土師器実測図	31
第6図	遺構配置図1	8	第29図	ビット・溝出土古式土師器実測図	32
第7図	遺構配置図2	9	第30図	溝出土古式土師器実測図	33
第8図	掘立柱建物実測図1	10	第31図	包含層出土古式土師器実測図1	34
第9図	掘立柱建物実測図2	11	第32図	包含層出土古式土師器実測図2	35
第10図	掘立柱建物実測図3	12	第33図	建物柱穴内出土中世土器・陶磁器実測図	38
第11図	掘立柱建物実測図4	13	第34図	ビット出土中世土器・陶磁器実測図	39
第12図	掘立柱建物実測図5	14	第35図	ビット・井戸出土中世土器・陶磁器実測図	40
第13図	掘立柱建物実測図6	15	第36図	井戸・土坑出土中世土器・陶磁器実測図	41
第14図	掘立柱建物実測図7	16	第37図	溝出土中世土器・陶磁器実測図	42
第15図	掘立柱建物実測図8	17	第38図	包含層出土中世土器・陶磁器実測図1	43
第16図	権列実測図	18	第39図	包含層出土中世土器・陶磁器実測図2	44
第17図	溝実測図1	19	第40図	土製品・石製品実測図	46
第18図	溝実測図2	20	第41図	石製品実測図1	47
第19図	溝実測図3	21	第42図	石製品実測図2	48
第20図	井戸実測図1	22	第43図	木製品実測図1	50
第21図	井戸実測図2	23	第44図	木製品実測図2	51
第22図	井戸実測図3	24	第45図	木製品実測図3	52
第23図	井戸実測図4	25	第46図	木製品実測図4	53
第24図	井戸実測図5	26	第47図	金属製品実測図・銭貨拓影図	55
第25図	土坑実測図1	27	第48図	古墳時代の土器実測図	56
第26図	土坑実測図2	28	第49図	縄文土器実測図	56
第27図	ビット実測図	29			

表 目 次

第1表	古式土師器観察表	36	第6表	木製品観察表	59
第2表	中世土器・陶磁器観察表	56	第7表	金属製品観察表	59
第3表	土製品観察表	58	第8表	銭貨観察表	59
第4表	石製品観察表	58	第9表	土師器・須恵器・縄文土器観察表	59
第5表	漆器観察表	58			

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯（第1図・第2図）

北陸新幹線は、全国新幹線鉄道整備法に基づき整備計画が定められている整備新幹線である。金沢・敦賀間の延伸については、平成24年6月に工事実施計画が認可されて同年8月に着工し、令和5年度末の開業に向けて建設工事が進められている。また、一般県道福井森田丸岡線は、福井市開発町の国道416号を起点に北上して九頭竜川を渡り、坂井市で地域高規格道路の福井港丸岡インター連絡道路に至る計画で事業が進められている。



第1図 遺跡と調査区的位置図

本遺跡に係る工事内容は、北陸新幹線の高架橋による線路敷が事業地の中央をほぼ南北に延び、高架橋の下部において上下各2車線の道路が事業地の両側を並行する計画となっている。また、併せて交差点と市道からの取付道路が整備されるものである。

各事業に係る埋蔵文化財の取扱いについて、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、福井県三国土木事務所、並びに同県教育庁生涯学習・文化財課及び埋蔵文化財調査センター（以下、「埋文センター」とする。）で協議を行い、埋文センターが平成28年の2月23・24日、3月16日及び6月7日に1次調査を実施した。各事業予定地内の適所に35箇所の調査坑を設定し、重機と人力で掘削を行った。調査の結果、5箇所で井戸、溝、土坑やピットを検出し、土師質皿や越前焼等が出土した。

1次調査の結果を受けて再度協議を行い、北陸新幹線建設事業に係る範囲476㎡と一般県道福井森田丸岡線道路改良工事に係る範囲2,449㎡を合算した2,925㎡については、記録保存のため発掘調査が必要となった。発掘調査と遺物整理に要する費用については、発掘調査の必要範囲に占める各事業地の面積を基に按分して各事業主体が負担することとした。

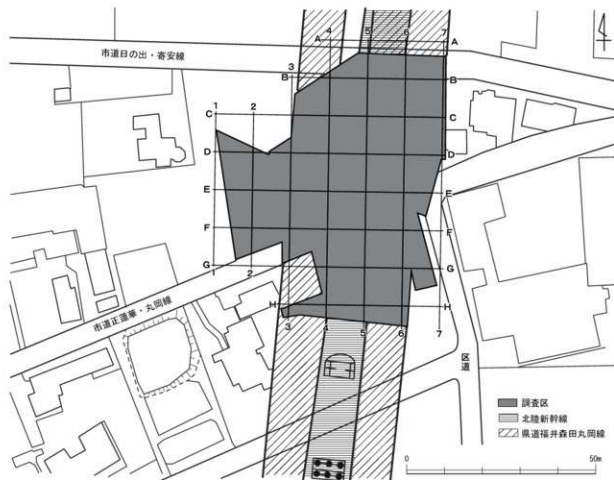
また、発掘調査の実施にあたっては、近隣地区の道路交通に支障が生じないように、調査区中央を南西から北東に伸びる市道正進花・丸岡線（以下、「市道1」とする）に係る範囲につき先に調査を完了させて市道1を復旧し、次に市道1北側の範囲と併せて調査区北端を東西に伸びる市道日の出・寄安線（以下、「市道2」とする）及び調査区東端を南北に伸びる区道に係る範囲、その後、市道1南側の範囲の順に調査を行うこととなった。

なお、調査区全体に10m四方のグリッドを設定し、東西に1～7列、南北にA～H列を配した。グリッドの名称は北西隅の交点で示し、以下「A1」のように表記する。

第2節 調査の経過

1 現地調査

現地調査は、9月1日から12月28日まで実施した。まず、市道1に係る範囲において、9月第1・2週目はトレンチ及び側溝を設定して地山まで掘削した。9月第3・4週目は、包含層を掘削して遺構面を精査した。市道1の路盤下部に上下水道管が埋設されているため遺存状況はあまり良好ではないものの、道路法面下部には溝や土坑等が遺存していることを確認した。9月第5週目と10月第1週目は遺構を掘削して記録作業も行い、10月7日に調査を終了した。



第2図 調査区のグリッド配置図 (縮尺1/1,000)

次に市道1北側の範囲において、10月第2・3週目はトレンチ及び側溝を設定して地山まで掘削した。トレンチの断面で土層堆積を観察し、旧地形や包含層、遺構面等の状況を把握した。10月第4週目と11月第1週目は、包含層を掘削して遺構面を精査した。調査区の旧地形は、微高地と南端の低地からなり、南北へ向け緩く傾斜することを確認した。遺構は、ピットが調査区の中央から西側で多くまとまり、溝や井戸、土坑等はピットがまとまる範囲の周辺に多く分布することを確認した。また、市道2及び区道に係る範囲においては、市道1北側の範囲と併行して11月第1・3週目にトレンチから包含層まで掘削して遺構面を精査した。いずれも11月第4週目まで遺構を掘削して記録作業も行い、11月24日に調査を終了した。

次に市道1南側の範囲において、12月第1週目はトレンチ及び側溝を設定して地山まで掘削した。12月第2週目は包含層を掘削して遺構面を精査し、12月第3週目は遺構を掘削して記録作業も行った。12月第4週目は器材の撤収等を行い、12月28日に調査を終了した。

2 遺物整理

遺物整理は、平成30年度から開始した。以下、実施した主な作業について記す。

平成30年度は洗浄・注記・接合作業、令和元年度は復元作業、同2年度は実測作業、同3年度は遺物・遺構図のトレース作業と遺物の写真撮影を行い、原稿を執筆して報告書を作成した。また、木製品11点は、平成30年度に外部に委託して保存処理と樹種鑑定を行った。

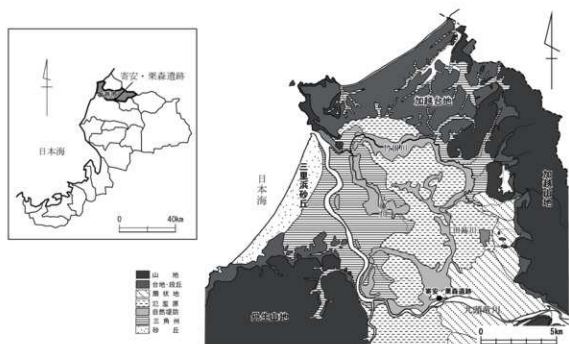
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境 (第3図)

福井県は、敦賀市北東の木ノ芽山嶺を境として、行政的には嶺北と嶺南の各地方に区分されている。嶺北地方は、北東を加越山地で石川県、南東を越美山地で岐阜県と接し、西に丹生山地があり三方を囲まれ、中央には越前中央山地が南北にのびる。各山地に源をもつ九頭竜川、足羽川、日野川等の主要な河川は、北西へ向けて集まり日本海に流出している。平野の大部分は、主要な河川により形成された沖積平野で、九頭竜川流域は大野・勝山両盆地と坂井平野、足羽川流域は福井平野、日野川流域は鯖武盆地がある。

坂井平野は、竹田川や兵庫川等の諸河川が九頭竜川へ合流して北西の日本海へ流出する間、平野流入部の東縁一帯に複合扇状地帯、平野中央部に氾濫原、西部に三角州が形成されている。また、氾濫原面上では自然堤防や後背湿地が形成されており、特に坂井市丸岡町から三国町にかけて竹田川流域の自然堤防は長さが約13km余に及び、かつては比高差が2m以上あったとされる。しかし、過去数回にわたる土地改良事業により大規模に削平され、自然堤防等の旧地形は容易に判別出来なくなっている。現況は平坦な水田だが、かつては「クロ」と呼ばれる自然堤防ないし微高地が多く存在していた。

寄安・栗森遺跡は、坂井平野の南部で坂井市春江町寄安及び福井市栗森町に所在し、九頭竜川支流である磯部川左岸の自然堤防ないし微高地上に立地している。



第3図 遺跡周辺の地形分類図 (縮尺 1/250,000)

第2節 歴史的環境 (第4図)

寄安・栗森遺跡の所在する坂井平野では、これまで縄文時代以降の遺跡が多数確認されている。特に近年は、兵庫川流域を中心に竹田川や磯部川流域でも発掘の調査例が増加し、多くの成果が得られている。以下、時代別に周辺の主要な遺跡について概説する。

縄文時代

遺跡数は少ないが中期から存在し、後期から晩期にかけて増加する。

中期では、舟寄遺跡(11)で竪穴住居や掘立柱建物、住居内外の埋甕、焼土や炭化物を多量に含む焼土土坑、立石を有する土坑等が多数検出されている。土器や石器が多量に出土し、釣手土器や三角埴形土製品、翡翠製玉類等も出土している。住居や建物の配置が弧状を呈しており、環状集落の可能性が指摘されている。西長田遺跡(2)では土坑等から土器や石器が出土している。

後期では、沖布目北遺跡(12)で土器が採集されている。

晩期では、舟寄福島通遺跡(10)で埋甕や住居と考えられる柱穴群が多数検出され、多量の土器や石器の他、石冠、石棒、土版等の祭祀遺物が出土した。若宮遺跡(9)で土坑等から土器が出土している。

弥生時代

中期から存在するが、遺跡数は後期後半に増加し、古墳時代前期まで継続している例が多い。

中期では、鷺塚遺跡(6)、中角遺跡(7)、若宮遺跡(9)、舟寄福島通遺跡(10)で方形周溝墓が検出されている。鷺塚遺跡では方形周溝墓と土壇墓が混在する墓域が検出され、土器や石器の他に玉作関係遺物が出土している。

後期後半から古墳時代前期では、西長田遺跡(2)、本堂漆橋遺跡(3)、中角遺跡(7)、若宮遺跡(9)、舟寄福島通遺跡(10)、高柳・下安田遺跡(20)等の遺跡があり、玉作関係遺物が出土する例が多くみられる。中角遺跡では前方後方墳を含む周溝墓が多数検出され、越前地域では最大規模となる墓域が確認されている。高柳・下安田遺跡では竪穴住居、掘立柱建物、布垣建物等が多数検出され、多量の土器と玉作関係遺物や銅鐸片、発泡土器が出土した。玉作りや青銅器の鑄造を行っていた集落と考えられている。他に上安田向田遺跡(21)では竪穴式建物、若宮遺跡や舟寄福島通遺跡で平地式住居、西長田遺跡、本堂漆橋遺跡で溝、土坑、井戸が検出されている。

古墳時代

遺跡数は前期にやや存在するが、中期から後期では少なくなる。

前期では、寄安・栗森遺跡(1)、鷺塚遺跡(6)、東太郎丸遺跡(4)、江留下遺跡(5)、北横地森里遺跡(19)等がある。寄安・栗森遺跡で掘立柱建物や溝、鷺塚遺跡で竪穴住居や掘立柱建物、東太郎丸遺跡で溝や土器溜り等、北横地森里遺跡では土坑が検出されている。また、江留下遺跡では方墳が検出されている。

中期では、河合寄安遺跡(23)で竪穴住居や掘立柱建物の他に井泉が検出されている。井泉から刀剣装具や琴、舟形等の木製品が多量に出土しており、水辺の祭祀に関連した施設と考えられている。また、舟寄福島通遺跡(10)では井戸から土師器や須恵器が出土している。

後期では、石盛遺跡(22)で掘立柱建物や溝等が検出され、輪や滓等が出土している。集落内で金属製品の精製が行われていたと推察されている。

古代

遺跡数は8世紀前半では少なく、8世紀後半から9世紀に増加し、10世紀から11世紀は僅かである。

8世紀後半から9世紀では、西長田遺跡(2)、東太郎丸遺跡(4)、江留下遺跡(5)、石盛遺跡(22)等の遺跡がある。東太郎丸遺跡や石盛遺跡で掘立柱建物や溝、井戸等、西長田遺跡では土坑等が検出され、いずれも須恵器を中心に土師器が出土している。石盛遺跡では墨書土器の他に円面硯や風字硯が出土しており、識字層の存在が指摘されている。江留下遺跡では時期不詳だが鶴尾の破片が出土している。

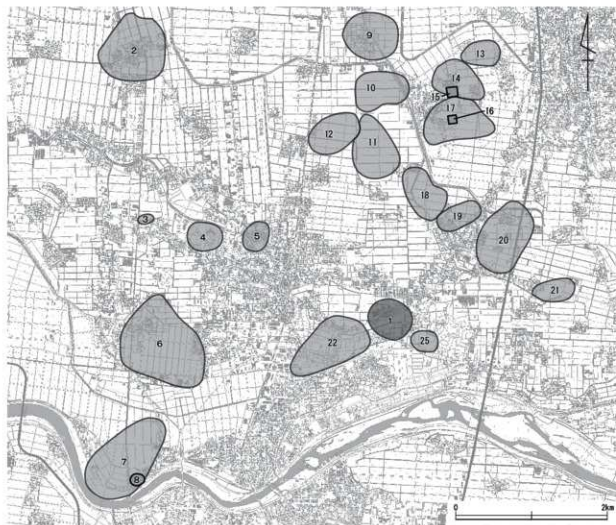
9世紀から10世紀では、中角遺跡(7)で畑の畝跡と考えられる畝状遺構が検出され、包含層から馬形土製品やガラス小玉が出土している。

中世

遺跡数は、鎌倉時代の13世紀と室町時代の15世紀から16世紀にやや多く、他の時期は僅かである。

13世紀では、寄安・栗森遺跡(1)で掘立柱建物や土坑等を検出し、僅かながら土師質皿や常滑焼が出土している。江留下遺跡(5)、若宮遺跡(9)で井戸や土坑が検出され、土師質皿や越前焼等が出土している。舟寄築山遺跡(13)、舟寄本廟遺跡(14)では掘立柱建物、水溜拵、井戸、溝が検出されている。

15世紀から16世紀では、中角遺跡(7)、中角館跡(8)、東太郎丸遺跡(4)、若宮遺跡(9)、長崎遺跡(17)、石盛遺跡(22)等の遺跡がある。大半で掘立柱建物や溝、井戸、土坑等が多数検出され、越前焼や輸入陶磁器、木製品、石製品等が出土している。長崎遺跡では区画溝、道路、屋敷が整然と配置されていたことが判明した。中角遺跡では複数の堀割による大規模な土地区画が検出されており、水路網の整



第4図 周辺の遺跡分布図(縮尺1/25,000)

備による物流拠点の構築が意図されたと考えられている。中角館跡は朝倉氏家臣の乙部勘解由左衛門の居館と推定されている。若宮遺跡では井戸が多数検出されており、村落における共同水場の土地利用が想定されている。石盛遺跡では堀で区画された内側から多数の遺構が検出され、『太平記』に記された「石丸城」であったと推定されている。また、堀から烏帽子が出土している。

参考文献

- 1 福井県教育委員会 1987 『福井県の中・近世城館跡』
- 2 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2002 『西長田遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第 61 集
- 3 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『江留下遺跡(境元町地区)』 福井県埋蔵文化財調査報告第 33 集
- 4 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『東太郎丸遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第 39 集
- 5 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『中角遺跡 1 I 区上層編』 福井県埋蔵文化財調査報告第 100 集
- 6 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『上安田向田遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第 103 集
- 7 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『中角遺跡 2 I 区下層編』 福井県埋蔵文化財調査報告第 105 集
- 8 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2010 『中角遺跡 3 II・III 区上層編』 福井県埋蔵文化財調査報告第 110 集
- 9 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2010 『高柳・下安田遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第 112 集
- 10 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011 『中角遺跡 4 II・III 区下層編』 福井県埋蔵文化財調査報告第 117 集
- 11 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011 『舟寄福島通遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第 120 集
- 12 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2012 『若宮遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第 127 集
- 13 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2013 『舟寄遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第 136 集
- 14 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2013 『石盛遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第 145 集
- 15 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2016 『鷺塚遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第 160 集
- 16 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2017 『本堂津橋遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第 163 集
- 17 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2019 『寄安・栗森遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第 168 集
- 18 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2018 『年報 33 -平成 28 年度-』
- 19 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2020 『年報 35 -平成 30 年度-』
- 20 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2021 『年報 36 -令和元年度-』
- 21 丸岡町教育委員会 2006 『松木遺跡』
- 22 福井市教育委員会 2011 『河合寄安遺跡 発掘調査報告書 I』
- 23 福井市教育委員会 2012 『寄安遺跡 発掘調査報告書 I』
- 24 福井市教育委員会 2014 『石盛遺跡』
- 25 福井市教育委員会 2015 『石盛遺跡 II』

第3章 概要

1 基本層序 (第5図)

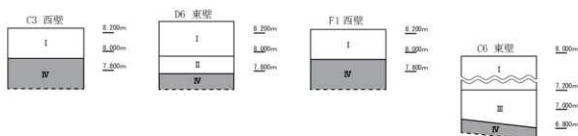
調査区の旧地形は大半が微高地からなり、A・B2～B18にかけてひろがる。A・B1付近では西方だが全体的には東方へ向けて緩く傾斜しており、調査区の東西端で比高差は約0.3mとなる。調査区の現況は水田である。以下、B10の北壁面で観察した土層堆積について記す。

I層 暗灰黄色粘質土を基盤とし、層厚約40cmを測る。水田の耕作土と床土からなる現代の客土である。

II層 黒褐色粘質土を基盤とし、層厚約10～20cmを測る。粒径大の黒褐色ないし黄褐色粘質土や炭を含む遺物包含層である。

III層 黄褐色粘質土を基盤とする。調査区内で堆積状況は様々ではなく、西端のA・B1付近やB13以東は漸移的に緑灰色粘質土が基盤となる。地山であり、III層上面で遺構を検出した。

遺物包含層や遺構面は、調査区全体で耕地整理等による削平を受けているが、攪乱された範囲は少なく比較的良好的な遺存状況であった。



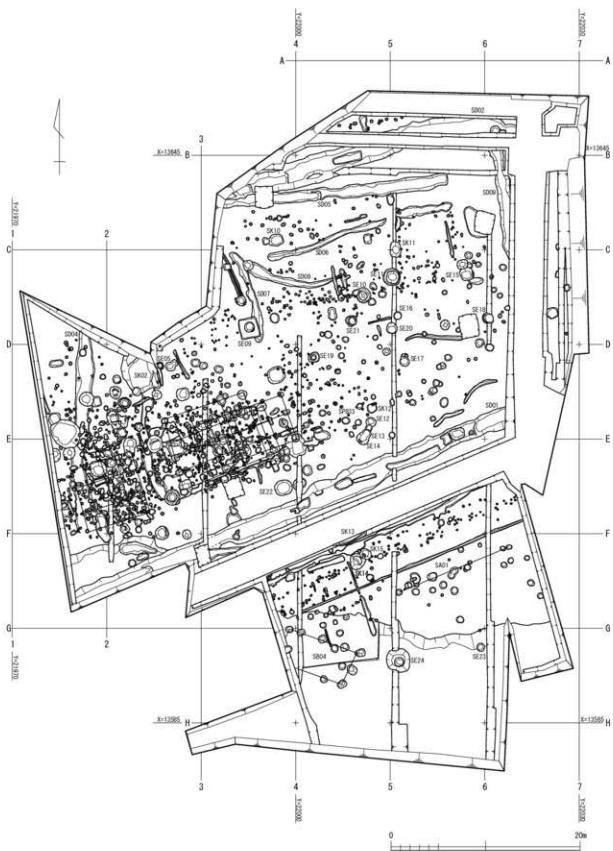
第5図 基本層序

2 遺構 (第6・7図)

遺構は、掘立柱建物4棟、柵列1条、溝9条、井戸24基、土坑15基、ピット多数を検出した。掘立柱建物やピットは調査区の中央から西側でまとまり、溝や井戸、土坑等は建物がまとまる範囲の周辺で多く検出した。SB01～03はやや不整形だが桁行3～5間で梁間2～4間ほどの総柱建物である。SD01に平行して北東から南西方向に棟をもち、建替えや重複がみられる。SD01・02は同様な形状を呈し、南西から北東方向に平行してのびる。また、SD02・09は、調査区北東端でほぼ直交しており、コの字状に区画された屋敷地境の溝と推察される。井戸は素掘りが多く、井戸側に石組1基、曲物積6基を検出した。SE08はやや大形で、井戸側中程に河原石が2～3段積まれている。また、曲物積は1・2段据えられたものが多いが、SE24では4段分が設置されていた。

3 遺物

遺物は天箱40箱分出土し、内訳は土器・陶磁器が5割強、木製品が3割、石製品が1割強からなる。土器・陶磁器は中世の土師質皿や越前焼等が中心であり、青磁、白磁、瀬戸美濃焼や瓦質土器等も少量含む。また、弥生時代後期末の土器もやや多く出土しており、他に縄文土器、土師器や須恵器が僅かに含まれる。木製品は漆器の椀や皿、箸、曲物、下駄等があり、石製品は砥石、粉挽臼、盤、行火、五輪塔、宝篋印塔等がある。金属製品では銭貨等が少量出土した。遺物は包含層から4割、遺構から6割が出土し、特にSD01・02・08やSE08・10・24、SK13等からまとまって出土している。



第6図 遺構配置図1 (縮尺1/400)

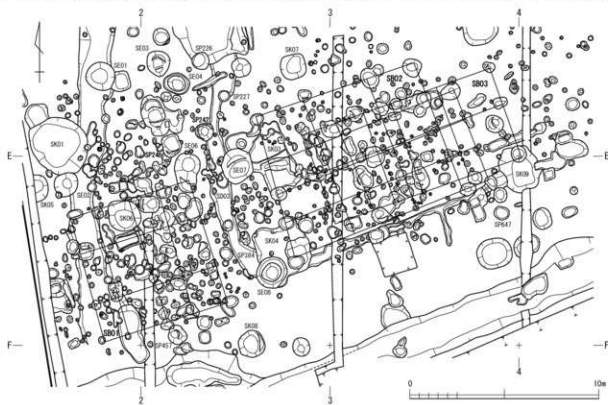
第4章 遺構

第1節 掘立柱建物（第8～15図）

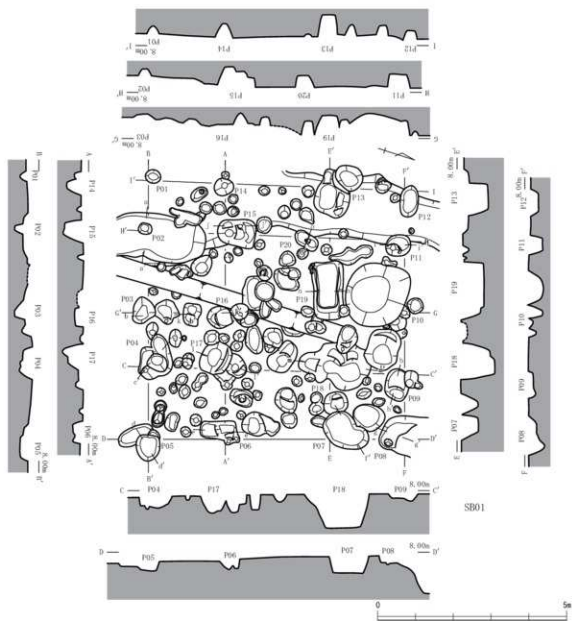
SB01（第8～10図）E1・2で調査区西端に位置する。桁行4間×梁間3間の総柱建物で北東から南西方向に棟をもち、棟方向はSB02・03やSD01と平行する。規模は桁行6.7mで梁間6.8mを測り、平面がほぼ正方形を呈す。柱間幅は桁行が1.4～2.0mで梁間が2.0～2.8mと不規則である。P01・02・11～15がSD04、P08がSE06と重複しており、SD04やSE06が埋没後に構築されている。また、P04・05・10・15から土師質皿、P18で越前焼播鉢、青磁碗、木製品の漆器皿、P04で石製品の仕上砥が出土している。P13では底面から五輪塔地輪が出土しており、礎石として据えられたとも考えられる。他にP04～09・11～15等で弥生土器の破片が少量出土した。

SB02（第10～12図）D・E2～4でSB01の北東側に位置する。桁行3間×梁間4間の総柱建物で北東面に庇が付き、北東から南西方向に棟をもつ。規模は桁行9.2mで梁間7.4mを測り、平面がやや不整形な形状を呈す。柱間幅は桁行が2.6～3.5mで梁間が1.6～2.5mと不規則である。P10・11がSK03、P01・12がSK04と重複しており、SK03・04が埋没後に構築されている。他にP01・17がSD03と重複するが前後関係は不詳である。また、P08・20・22から土師質皿、P11で越前焼甕、P08で越前焼播鉢が僅かに出土した。P02では覆土中層で五輪塔火輪が逆位となり、40cm大の河原石と重なって出土している。P12では、越前焼播鉢や石製品の行火が出土し、底部付近で5～20cm大の河原石を集石状に検出した。他にP06～09・11等で弥生土器の破片が少量出土した。

SB03（第13・14図）D・E2～4でSB02の東半に位置する。桁行5間×梁間2間の総柱建物で、北東から南西方向に棟をもつ。規模は桁行10.4mで梁間5.0mを測り、平面が長方形を呈す。柱間幅は桁



第7図 遺構配置図2（縮尺1/200）



第8図 掘立柱建物実測図1 (縮尺1/100)

行が1.2~3.0mで梁間が2.0~3.0mを測る。梁間が平行せず、P04・09・16は列から外れて柱間幅も不規則であり、建物としたが不明確である。P06がSK09と重複しており、SK09が埋没後に構築されている。SB02と重複するが前後関係は不詳である。また、P12から石製品の仕上砥、P02・04・17で越前焼の破片が僅かに出土した。P16では、越前焼片口鉢が出土し、底部付近で10~20cm大の河原石を集石状に検出した。他にP01~04・07・08・16等で弥生土器の破片が少量出土した。

SB04 (第15図) G 3・4で調査区南西端に位置し、桁行4間×梁間2間の側柱建物である。北西隅柱は調査区外へ続き、南東から北西方向に棟をもつ。規模は桁行7.2mで梁間3.8mを測り、平面が長方形形状を呈す。柱間幅は桁行が1.2~2.4mで梁間が1.8~2.2mを測る。SE24と同様に傾斜変換点付近に当たり、低地がほぼ埋没した後に構築されている。また、P02から土師質皿、越前焼の甕や片口鉢、青磁碗、白磁皿等がやや多く出土し、P03・07・08で越前焼の破片等が僅かに出土した。

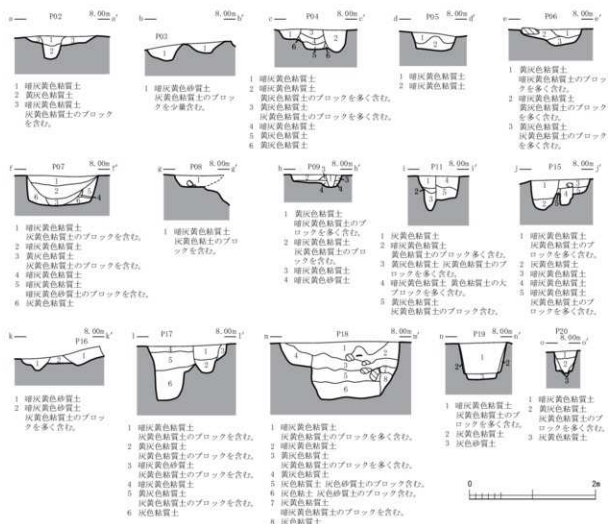
第2節 柵列 (第16図)

SA01 (第16図) F 5・6 でSB04の北東に位置する。規模は5間で全長13.3m、柱間幅は1.8~3.8mほどを測る。構成する柱穴の形状がやや不均一であり、柱間幅も不規則である。柵列の方向はほぼ南西から北東にのびてSD01と平行する。P01から越前焼播鉢や木製品下駄、P06で土師質皿が出土した。

第3節 溝 (第17~19図)

SD01 (第17図) D 5・6、E 3~5、F 1~3にかけて検出した。SB01~03の南東に位置し、平面は幅広く直線的に南西から北東にのびる。西端は調査区外へ続き、東端は攪乱により遺存しない。断面は平坦な底部をもち、やや深く斜めに立ち上がる。また、西端は北側の肩部、東半は底部に段が形成されている。SD01は、SD02とほぼ平行して同様な形状を呈す。越前焼の片口鉢や播鉢、青磁碗、白磁皿、瀬戸・美濃焼の天目茶碗、瓦質土器破片、石製品の中砥、粉挽臼、宝篋印塔笠部等が多量に出土し、弥生土器の破片が僅かに出土した。

SD02 (第17図) A 4~6、B 3・4にかけて検出した。調査区北端に位置し、平面は幅広く直線的に南西から北東にのびる。西端は調査区外へ続き、東端は攪乱により遺存しない。断面はやや平坦な底部をもち、やや深く斜めに立ち上がる。また、西半には底部や肩部に段が形成されている。土師質皿、越



第9図 掘建柱建物実測図2 (縮尺1/60)

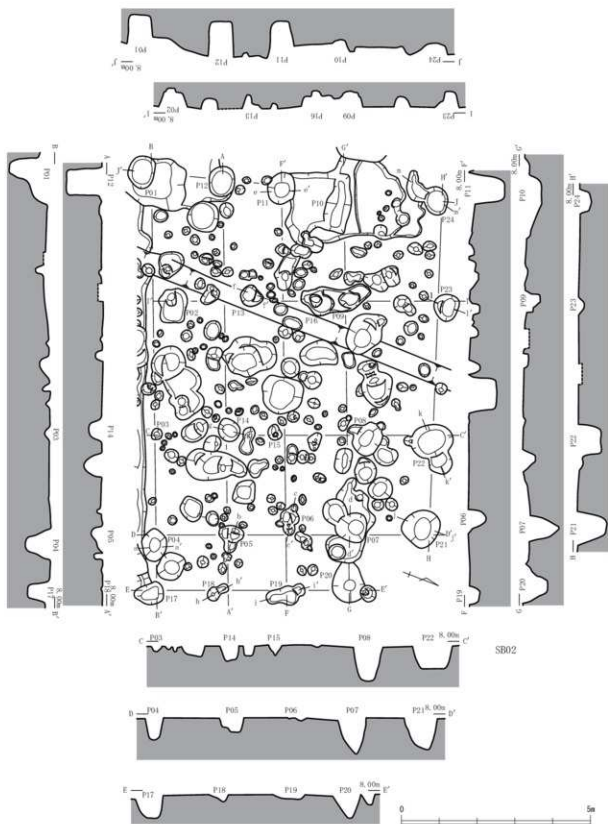


第10図 掘建柱建物実測図3 (縮尺1/40)

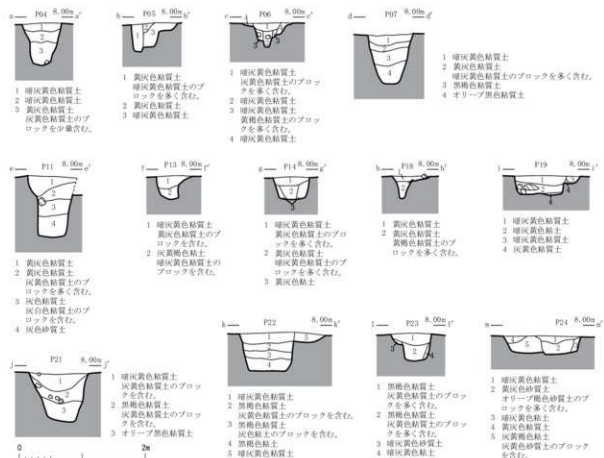
前焼の甕、片口鉢、挿鉢、白磁皿、瓦質土器、石製品の中砥や五輪塔空風輪の他、縄文土器の深鉢、弥生土器の甕や高坏・器台等が多量に出土した。

SD03 (第18図) D 2、E 2～4 にかけて検出し、SB02の南西に位置する。平面は北西半がやや緩く湾曲して南北にのび、途中で屈曲して南東半は細長く直線的に南西から北東にのびる。SB02・03の桁行や梁間とほぼ平行しており、区画溝であると考えられる。また、SB02のP01・17、SE07・08、SK02・04・09、SP227・242等の他に多くの遺構と重複するが前後関係は不詳である。越前焼や白磁の破片の他、弥生土器の破片が少量出土した。

SD04 (第18図) C～E 1 でSB01の北西に位置し、平面はやや幅広く途中で僅かに湾曲する。ほぼ南北にのびて北端は調査区外へ続き、断面は浅く立ち上がる。また、SB01のP01・02・11～15、SE01、



第11圖 掘建柱建物実測図4 (縮尺 1/100)



第12図 掘立柱建物実測図5 (縮尺1/60)

SK01・02の他に多くの遺構と重複しており、いずれもSD04が埋没後に構築されている。土師質皿や石製品の中砥の他、弥生土器の甕や高坏・器台などが僅かに出土した。

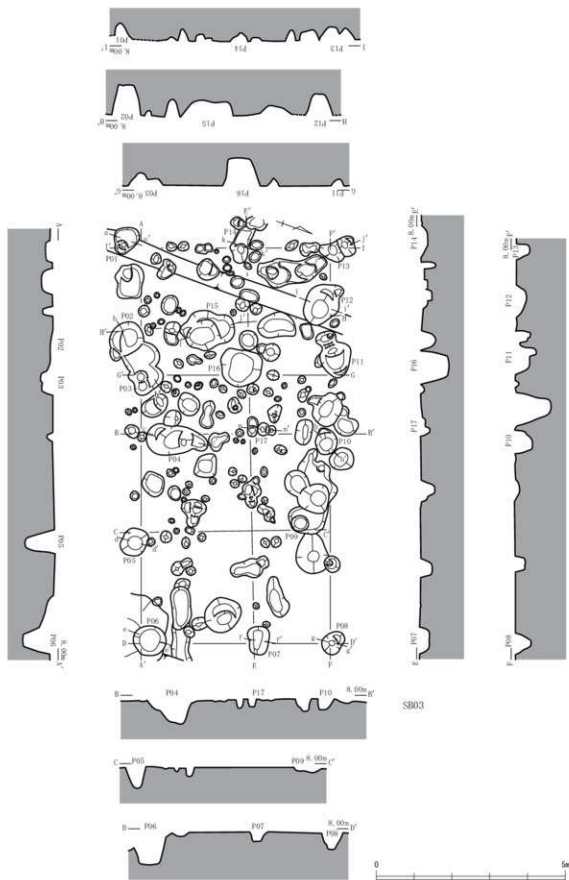
SD05 (第18図) B 3～5でSD02の南側に位置し、平面はやや幅広く直線的にほぼ東西にのびる。断面は東半が浅く、西半は途中で段があつて緩く立ち上がる。また、土師質皿、越前焼片口鉢、瀬戸・美濃焼の灰軸卸皿等が少量出土し、弥生土器の甕や高坏・器台等がやや多く出土した。

SD06 (第18図) B 4・5からC 3・4にかけて検出し、SD05の南側に位置する。平面はやや細長く僅かに湾曲して東部で途切れ、南西から北東にのびる。断面は浅く立ち上がる。

SD07 (第19図) C 3でSD06の南西に位置し、平面はやや細長く不整形な形状を呈す。僅かに湾曲してほぼ南北にのび、断面はやや緩く立ち上がる。また、SE09と重複するが前後関係は不詳である。土師質皿や越前焼甕の他、弥生土器の高坏・器台等が少量出土した。

SD08 (第19図) C 3・4でSD06の南西に位置する。平面はやや細長く緩やかに湾曲して北西から南東にのび、断面は浅く立ち上がる。また、弥生土器の甕や高坏・器台等が多量に出土した。

SD09 (第19図) A～C 6でSD02の南東に位置する。平面はやや幅広く直線的にほぼ南北にのび、断面は緩く立ち上がる。南東半は攪乱により遺存しないが、SD01・02と直交する方向にのびており、屋敷地境の溝であると考えられる。



第13圖 掘建柱建物実測図6 (縮尺 1/100)

第4節 井戸 (第20~24図)

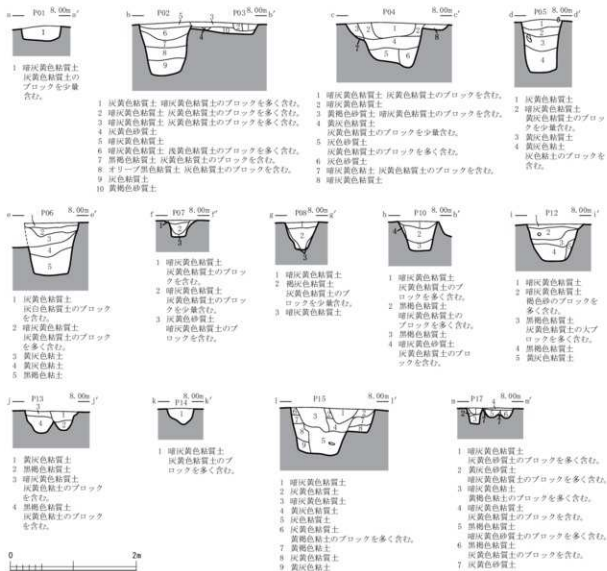
SE01 (第20図) D 1でSD04の北東肩部に位置する。SE02~04・06・07と同様に素掘りの井戸であり、掘方は平面が円形で長軸1.6mを測る。断面は幅広の筒状で上方へ斜めに開き、深さ0.9mを測る。また、SE02と同様にSD04と重複しており、埋没後にSE01・02が構築されている。輪郭羽、越前焼挿鉢等が僅かに出土した。

SE02 (第20図) E 1でSB01の北西に位置する。掘方は平面が円形で長軸1.3mを測り、断面はSE03・04と同様に筒状で上方へ斜めに開き、深さ1.3mを測る。また、越前焼破片が僅かに出土した。

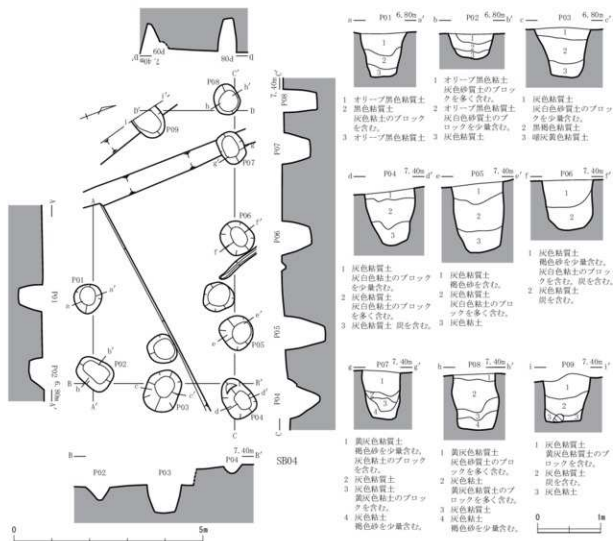
SE03 (第20図) D 2でSE01の北東に位置し、掘方は平面が円形で長軸1.4mを測る。断面は南北の底部に緩く段をもち、中程から上方へ斜めに開く。深さは1.2mを測る。白磁破片が僅かに出土した。

SE04 (第20図) D 2でSE03の南東に位置する。掘方は平面が東西へひろがる楕円形で、長軸1.4mを測る。断面は上部で段をもち、斜めに大きく開く。深さは0.9mを測る。

SE05 (第20図) D 2でSB02の北西に位置し、井戸側に曲物をもつ。掘方は平面が小形の楕円形で、長軸0.8mを測る。断面は筒状で上方へ斜めに緩く開き、深さは0.8mを測る。曲物は1段分て薄板材1



第14図 掘立柱建物実測図7 (縮尺1/60)



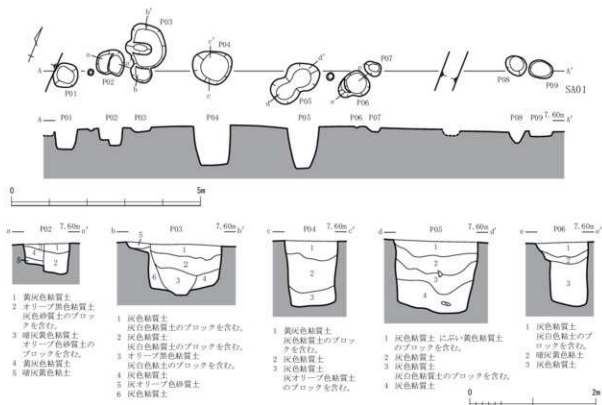
第15図 掘建柱建物実測図8 (縮尺1/80・1/100)

枚からなり、径0.3~0.5mで高さ0.1mを測る。樫閉じが外れてやや変形した状況であり、上位の曲物部材が抜き取られたと考えられる。また、土師質皿、越前焼挿鉢等が少量出土した。

SE06 (第20図) D・E2でSB01の北東に位置する。掘方は平面がやや不整な円形状で、長軸1.6mを測る。断面はSE07と同様に幅広の筒状を呈し、南半の上部で屈曲して斜めに大きく開く。深さは1.0mを測る。また、SB01のP08と重複しており、SE06が埋没後に構築されている。土師質皿、越前焼片口鉢が僅かに出土した。

SE07 (第21図) D・E2でSE06の東側に位置する。やや大形で掘方は平面が不整な円形状を呈し、北西の底部に段をもつ。長軸は1.9mを測る。断面は上方へ斜めに開き、深さ1.2mを測る。また、SK03と重複しており、埋没後にSE07が構築されている。

SE08 (第21図) E2でSB02の南西に位置し、井戸側中程に石組をもつ。掘方は平面が大形の円形状で、長軸1.7mを測る。断面は幅広の筒状で下部が斜めに開いて段をもち、上方へ直立気味に緩く立ち上がる。深さは1.9mを測る。石組は、20~30cm大の河原石がやや斜め上方に2~3段積上げられ、内径0.7~0.9mを測る。石組南西半の上位では、石組周辺に握拳大の河原石をまとめて検出しており、裏込めの栗石であるとも考えられる。また、SK04と重複しており、SK04が埋没後に構築されている。土師質皿、越



第16図 横列実測図 (縮尺 1/60・1/100)

前焼甕・挿鉢、青磁碗、瀬戸・美濃焼の天目茶碗、石製品の粉挽臼等が少量出土した。

SE09 (第21図) C 3でSD07の南西肩に位置する。試掘調査の際に井戸上半部を検出しており、井戸側下部に曲物をもつと考えられる。掘方は平面がやや小形の円形状で、長軸1.1mを測る。断面はやや幅広い筒状で上方へ斜めに緩く開き、深さは0.8mを測る。曲物は2段分で共に薄板材3枚からなり、径0.5mで高さ0.4mを測る。また、後述するSE10・16・24と同様、曲物の内面には1cm程の間隔で木目に直交する加工痕があり、製作時に刀子等の工具で施されたと考えられる。また、覆土上層で5～20cm大の角礫を集石状に検出し、土師質皿、越前焼甕・片口鉢、木製品の漆器皿、石製品の中砥等がやや多く出土した。

SE10 (第21図) C 4でSD08の南東に位置し、井戸側下部に曲物をもつ。掘方は平面がやや大形の円形状で、長軸は1.6mを測る。断面は上部で屈曲して斜めに大きく開き、深さ1.5mを測る。曲物は2段分検出し、上段が薄板材1枚、下段が薄板材3枚からなる。共に径0.6mで高さは下段が0.6mを測る。また、土師質皿、越前焼片口鉢、瀬戸・美濃焼の灰釉碗、木製品の漆器皿や箸、石製品の仕上砥等が多数に出土した。特に箸は320点ほどが出土している。他に弥生土器の甕、高坏・器台等も少量出土した。

SE11 (第22図) C 5でSE10の北東に位置し、SE12～15・17～22と同様に素掘りの井戸である。やや大形で掘方は平面が円形状を呈し、長軸は1.9mを測る。断面は筒状を呈し、上方で屈曲して斜めに開く。深さは1.6mを測る。

SE12～14 (第22図) D・E 4でSB03の東側に位置する。掘方はいずれも平面がやや小形の円形状を呈し、長軸は1.0～1.3mを測る。断面はSE12・13が筒状で上方へ斜めに緩く開き、深さは1.1～1.2mを測る。SE14はやや幅広い筒状で底部に段をもち、上方へ直立気味に立ち上がる。深さは1.2mを測る。また、SE13・14は重複しており、SE14が埋没後にSE13が構築されている。

SE15 (第22図) C 5でSE11の東側に位置する。掘方は平面が隅丸形状で、長軸1.6mを測る。断面は幅広の筒状で上方へ斜めに緩く開き、深さ1.0mを測る。また、越前焼片口鉢や弥生土器の甕等が僅かに出土した。

SE16 (第22図) C 5でSE11の南側に位置し、井戸側に曲物をもつ。掘方は平面が小形の円形状で、長軸0.9mを測る。断面は筒状で上方へほぼ直立して立ち上がり、深さ1.7mを測る。曲物は3段分検出し、上段が薄板材2枚、中・下段が薄板材3枚からなる。径0.4~0.5mで高さは0.4~0.5mを測る。また、土師質皿等が僅かに出土した。

SE17 (第22図) D 5でSE16の南側に位置する。掘方は平面がやや不整な楕円形状で、長軸1.4mを測る。断面はSE18と同様に筒状で北側肩部に段をもち、上方へ斜めに緩く開く。深さは1.4mを測る。また、土師質皿や越前焼片口鉢、弥生土器の甕等が僅かに出土した。

SE18 (第23図) C 5・6でSE15の南東に位置する。掘方は平面がSE19~21と同様にやや不整な円形状を呈し、いずれも長軸1.2mを測る。断面は上部で屈曲して斜めに開き、深さは1.2mを測る。また、越前焼甕、白磁皿等が僅かに出土した。

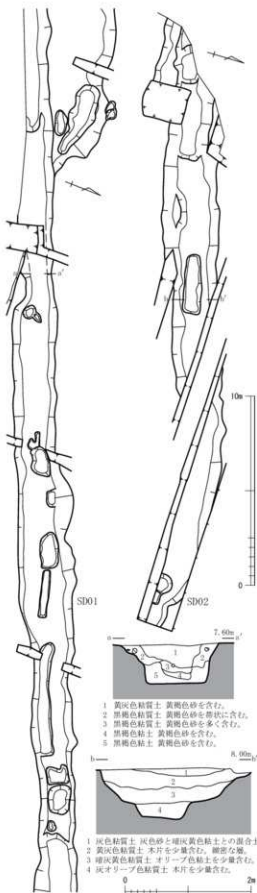
SE19 (第23図) D 4でSE17の西側に位置する。掘方は断面が幅広の下膨れ状で底部に緩く段をもつ。内径気味に立ち上がり、深さは1.1mを測る。

SE20 (第23図) C 4・5でSE16の南西に位置する。掘方は断面がやや幅広の筒状で上方へ斜めに開く。深さは1.1mを測る。また、越前焼甕等が僅かに出土した。

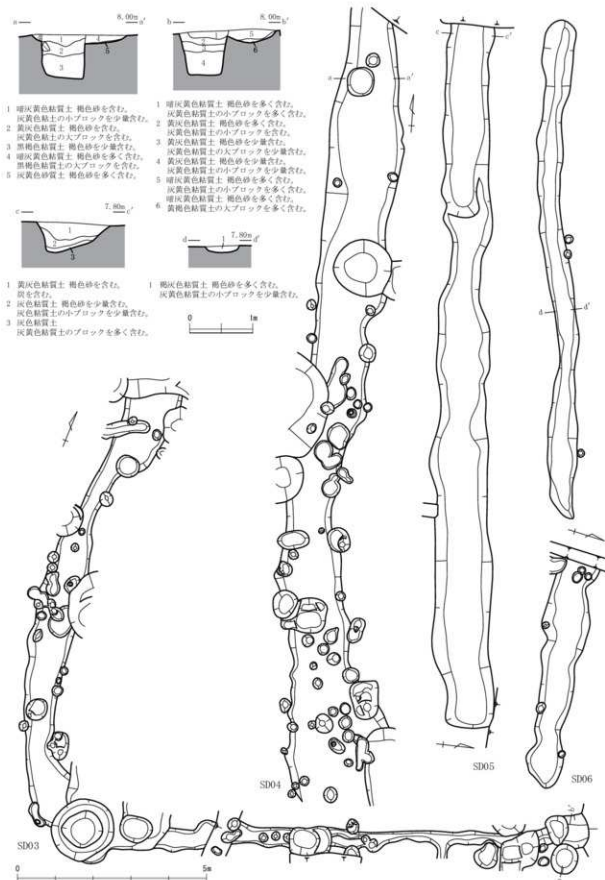
SE21 (第23図) C 4でSE10の南西に位置する。掘方は断面が上部で緩く屈曲し、上方へ斜めに緩く開く。深さは1.1mを測る。木製品の曲物が僅かに出土した。

SE22 (第23図) E 3でSB03の南東に位置する。掘方は平面が東西へひろがる不整な楕円形状を呈し、長軸1.9mを測る。断面は幅広の筒状で上方へ直立気味に立ち上がり、深さは1.6mを測る。

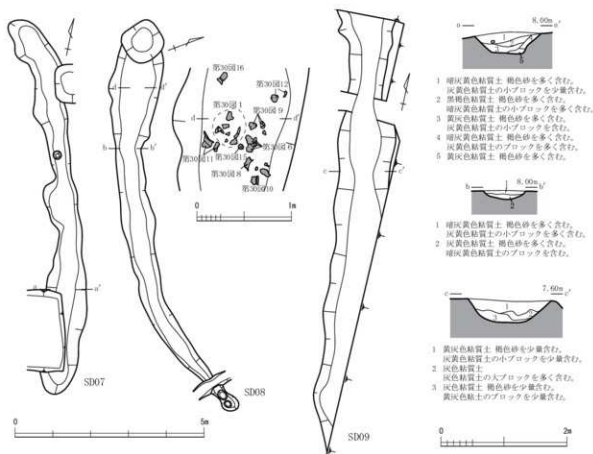
SE23 (第23図) G 5・6でSA01の南東に位置し、井戸側上部に曲物と木組をもつ。掘方は平面が小形の円形状で、長軸0.9mを測る。断面は筒状で上方へ斜めに緩く開き、深さ0.9mを測る。曲物は1段分で薄板材1枚が



第17図 溝突測図1 (縮尺1/60・1/200)



第18図 溝実測図2 (縮尺1/60・1/100)



第19図 溝穴測図3 (縮尺1/40・1/60・1/100)

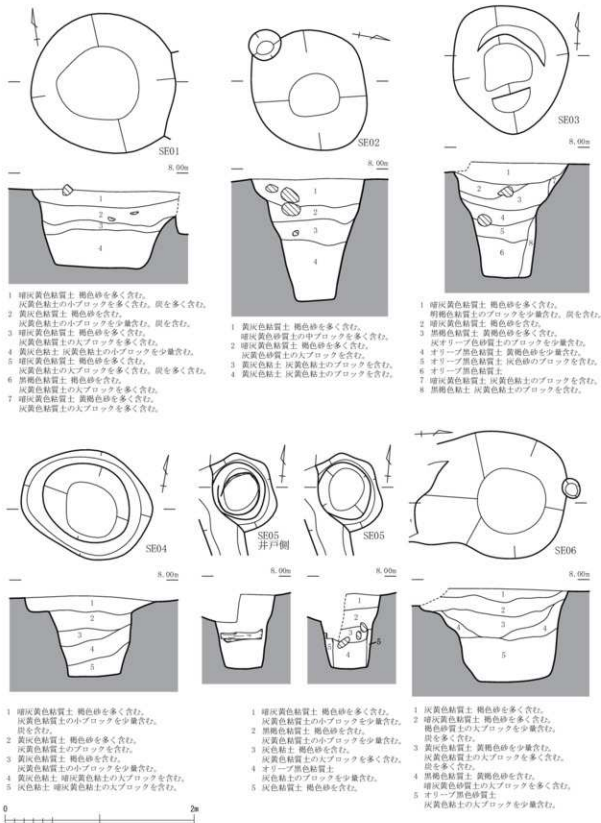
らなり、径0.5mで高さ0.1mを測る。木組は、曲物周辺で外方へ向け右斜め放射状に組まれており、幅8～10cmほどの板材が用いられている。また、曲物と木組の下位には、三辺に径3～4cmの丸太材が基礎として据えられていた。土師質皿や青磁碗、木製品の曲物等がやや多く出土した。

SE24 (第24図) G 4・5でSB04の東側に位置し、井戸側に曲物をもつ。掘方は平面が大形の円形状で、長軸2.8mを測る。断面は幅広の筒状で底部に段をもち、上方へ斜めに開く。傾斜変換点付近で低地がほぼ埋没した後に構築されており、覆土上面からの深さは2.1mを測る。曲物は4段分あり、上・中段は低地へ向けて斜めにずれた状況で検出した。いずれも薄板材2～3枚からなり、径0.4mで高さは0.4～0.5mを測る。また、最下段の曲物上部では30cm大の河原石を検出しており、廃絶時の井戸祭祀に関連した行為とも考えられるが不明確である。最下段の曲物下位には、曲物と同じ素材である薄板材を三角形に折り曲げて一端を直線状に成形した部材が、基礎として据えられていた。底面が軟弱な粘質土であり、構築した曲物積みが沈下などしないよう設置されたと考えられる。土師質皿、越前焼甕・片口鉢、木製品の漆器碗の他、弥生土器の破片が多く出土した。

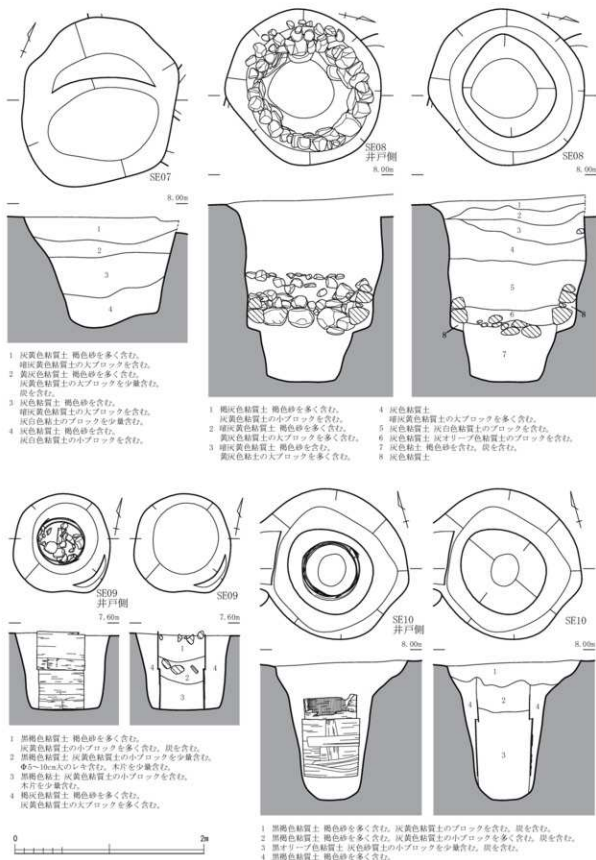
第5節 土坑・ピット (第25～27図)

SK01 (第25図) D・E 1でSB01の北西に位置する。平面は大形の円形状を呈し、断面はやや浅く緩やかに立ち上がる。SE02と重複しており、SK01が埋没後に構築されている。土師質皿や越前焼甕等の他、仕上砥等が少量出土した。

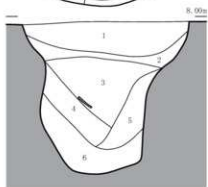
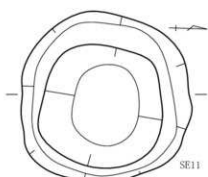
SK02 (第25図) D 2でSD03の北側に位置し、北東半は調査区外へひろがる。平面は大形で不整な楕円



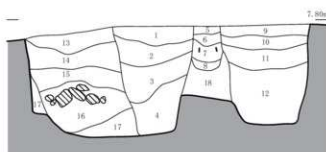
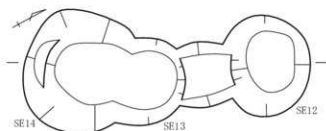
第20図 井戸実測図1 (縮尺 1/40)



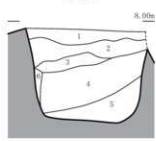
第21図 井戸実測図2 (縮尺 1/40)



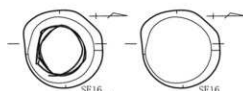
- 1 埴川黄色粘質土 褐色砂を多く含む。
- 2 埴川黄色粘質土の小平ブロックを少量含む。
- 3 埴川黄色粘質土のブロックを多く含む。炭を含む。
- 4 灰色粘質土 褐色砂を含む。
- 5 灰色粘質土 褐色砂を含む。
- 6 黒オリーブ色粘質土 灰色粘質土の大ブロックを多く含む。



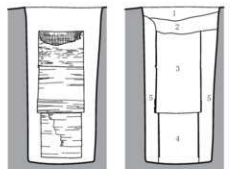
- 1 黄灰色粘質土 褐色砂を多く含む。灰黄色粘質土の大ブロックを含む。
- 2 黄灰色粘質土 褐色砂を少量含む。灰黄色粘質土の大ブロックを含む。
- 3 黄灰色粘土 褐色砂を少量含む。
- 4 灰色粘土 黒褐色砂を含む。
- 5 埴川黄色粘質土 褐色砂を含む。灰黄色粘質土の大ブロックを多く含む。
- 6 黄灰色粘土 褐色砂を含む。灰黄色粘質土のブロックを含む。
- 7 黄灰色粘質土 褐色砂を含む。灰黄色粘質土の大ブロックを多く含む。
- 8 黄灰色粘質土 褐色砂を含む。灰色粘質土のブロックを含む。
- 9 埴川黄色粘質土 褐色砂を多く含む。灰黄色粘質土のブロックを多く含む。炭を含む。
- 10 黄灰色粘質土 褐色砂を多く含む。灰色粘質土のブロックを多く含む。
- 11 灰色粘質土 褐色砂を少量含む。
- 12 灰色粘質土
- 13 埴川黄色粘質土 褐色砂を含む。灰黄色粘質土の大ブロックを含む。炭を散状に含む。
- 14 黄灰色粘土 褐色砂を少量含む。
- 15 黄灰色粘土 褐色砂を少量含む。灰色粘土の大ブロックを含む。
- 16 灰色粘土 黄灰色粘質土の小平ブロックを少量含む。
- 17 灰色粘質土
- 18 灰色粘土



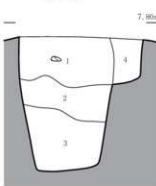
- 1 埴川黄色粘質土 褐色砂を多く含む。
- 2 灰黄色粘質土の小平ブロックを少量含む。
- 3 黄灰色粘質土 褐色砂を含む。炭を含む。
- 4 灰色粘質土 褐色砂を含む。
- 5 灰色粘質土 灰オリーブ色砂を含む。
- 6 灰色粘質土 褐色砂を多く含む。



SE16 井戸側

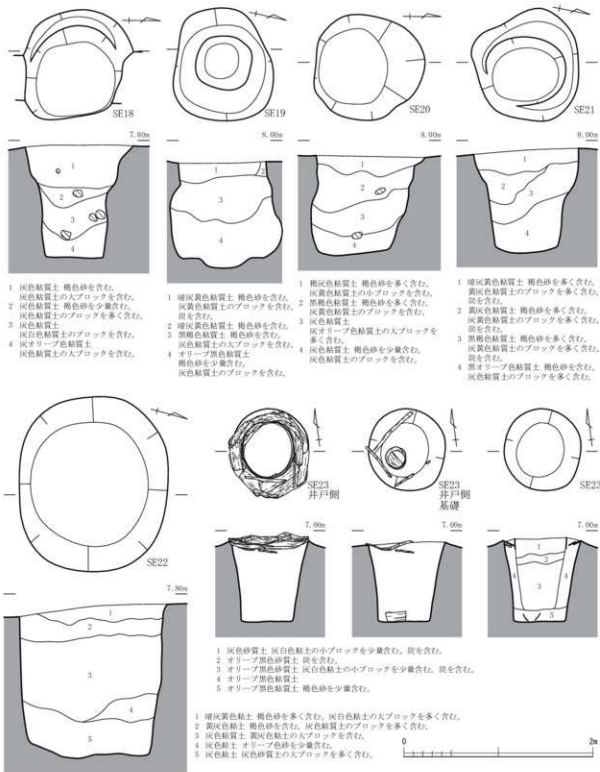


- 1 黄灰色粘質土 褐色砂を多く含む。
- 2 灰黄色粘質土の小平ブロックを少量含む。炭を含む。
- 3 黒褐色粘質土 褐色砂を含む。炭を多く含む。
- 4 黒褐色粘質土 褐色砂を少量含む。
- 5 灰色粘質土の小平ブロックを含む。
- 6 灰色粘質土 灰オリーブ色砂質土の小平ブロックを少量含む。
- 7 灰色粘土 褐色砂を少量含む。
- 8 灰オリーブ色粘質土のブロックを多く含む。



- 1 黄灰色粘質土 褐色砂を多く含む。炭を含む。灰色粘土のブロックを含む。
- 2 灰色粘質土 褐色砂を含む。
- 3 灰色粘質土の小平ブロックを含む。
- 4 黒褐色粘質土 褐色砂を少量含む。灰黄色粘質土の小平ブロックを少量含む。

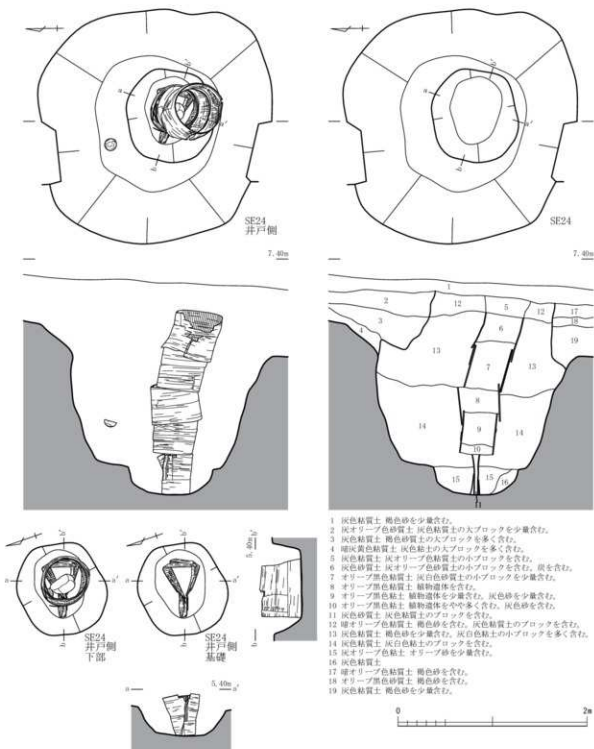
第22図 井戸実測図3 (縮尺1/40)



第23図 井戸実測図4 (縮尺1/40)

形状を呈し、東西の肩部に段をもち緩く立ち上がる。SP226と重複しており、SK02が埋没後に構築されている。また、土師質皿、越前焼甕・播鉢、青磁碗等が少量出土している。

SK03 (第25図) D・E 2でSB02の北西に位置する。平面は大形で凹凸のある不整形な形状を呈し、底面に段をもつ。SB02のP10・11やSE07と重複しており、SK03が埋没後に構築されている。また、土師質皿、

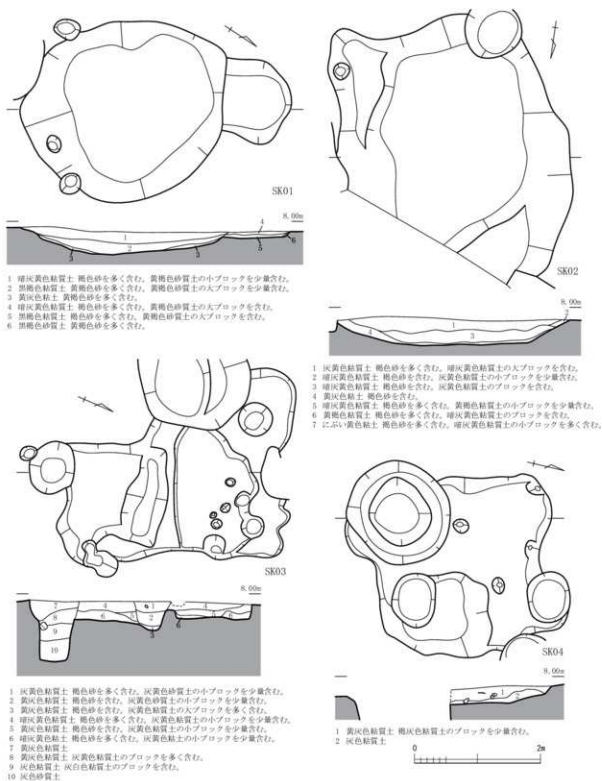


第24図 井戸実測図5 (縮尺1/40)

越前焼片口鉢、青磁碗等が僅かに出土した。

SK04 (第25図) E 2でSB02の南西に位置する。平面は大形でやや不整な方形形状を呈し、断面は底面が平坦でやや浅く立ち上がる。SB02のP01・12やSE08と重複しており、SK04が埋没後に構築されている。また、SD03と重複するが前後関係は不詳である。土師質皿、弥生土器甕等が僅かに出土した。

SK05 (第26図) E 1でSK01の南西に位置し、西半は調査区外へひろがる。平面は円形状を呈し、断面

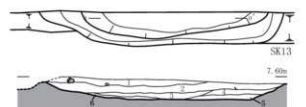
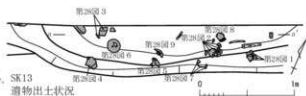
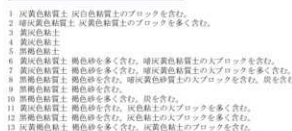
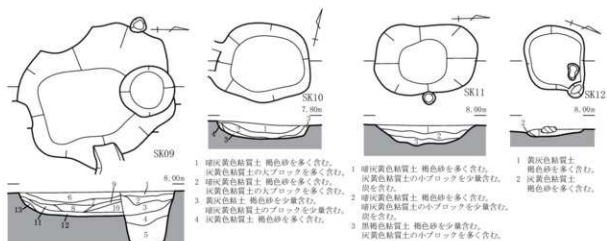
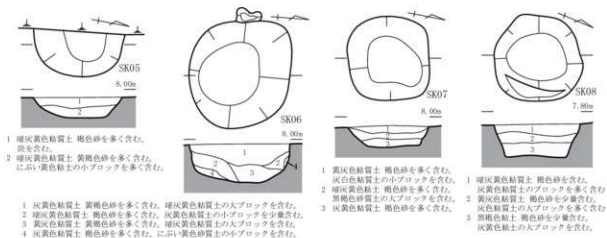


第25図 土坑実測図1 (縮尺 1/60)

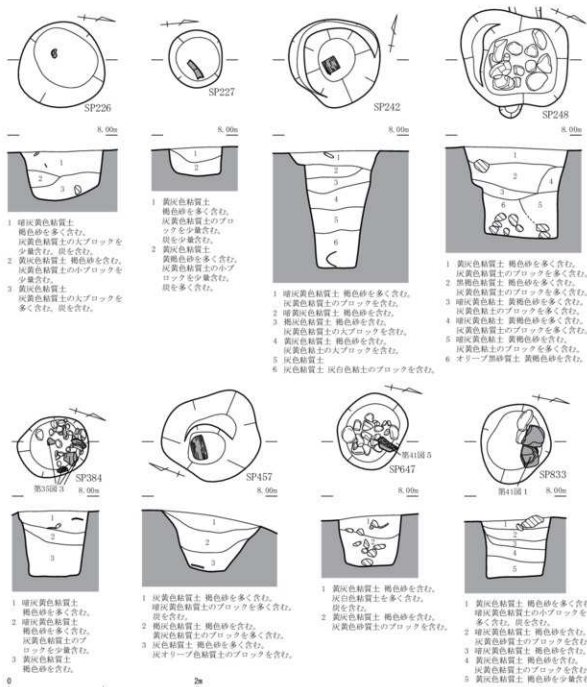
はやや浅く立ち上がる。また、土師質皿等が僅かに出土した。

SK06 (第26図) E 1でSB01の北部に位置する。平面はやや大形の円形状を呈し、断面はやや深く急に立ち上がる。また、越前焼甕・片口鉢、瀬戸・美濃焼の灰軸碗等が僅かに出土した。

SK07 (第26図) D 2でSB02の北西に位置する。平面は隅丸方形形状を呈し、断面はやや浅く立ち上がる。



第26図 土坑実測図2 (縮尺1/60)



第27図 ピット実測図 (縮尺 1/40)

また、越前焼破片が僅かに出土した。

SK08 (第26図) E・F 2 でSB01の南東に位置し、平面は円形状を呈す。断面は東側の肩部に段をもちやや緩く立ち上がる。また、越前焼破片が僅かに出土した。

SK09 (第26図) D・E 3・4 でSB03の南東に位置する。平面はやや大形の楕円形状を呈し、断面はやや浅く立ち上がる。SB03のP06と重複しており、SK09が埋没後に構築されている。また、SD03と重複するが前後関係は不詳である。

SK10 (第26図) B 3 でSD06の北西に位置する。平面は楕円形状を呈し、断面は浅くやや急に立ち上がる。また、土師質皿が僅かに出土した。

SK11 (第26図) B・C 5でSE11の北側に位置する。平面は南北に長い楕円形状を呈し、断面はやや浅く緩やかに立ち上がる。

SK12 (第26図) D 4でSE12の北側に位置する。平面はやや小形の円形状を呈し、断面は浅く立ち上がる。

SK13 (第26図) E・F 4でSB04の北側に位置する。北側の大半は道路等の造成による削平のため遺存しない。平面は大形の楕円形状を呈し、断面は底面が平坦で浅く緩やかに立ち上がる。また、弥生土器の甕、高坏・器台、小型土器等が多量に出土した。

SK14・15 (第26図) F 4でSK13の南東に位置する。共に平面はやや不整な円形状を呈し、断面は浅く緩やかに立ち上がる。また、SK14が埋没後にSK15が構築されている。また、土師質皿、越前焼の甕・片口鉢等が僅かに出土した。

SP226 (第27図) D 2でSK02の南肩に位置し、平面はやや不整な円形状を呈す。SK02と重複しており、SK02が埋没後に構築されている。また、白磁坏が僅かに出土した。

SP227 (第27図) D 2でSK02の南側に位置し、平面はやや小形の円形状を呈す。SP242と同様にSD03と重複するが前後関係は不明である。また、越前焼甕が僅かに出土した。

SP242 (第27図) D 2でSE06の北東に位置する。平面はやや不整な円形状を呈し、北西半の肩に段をもつ。また、木製品の曲物が僅かに出土した。

SP248 (第27図) D 2でSE06の北西に位置する。平面はやや不整な方形形状を呈し、底面が平坦で南側の肩に段をもつ。また、底部付近で20～40cm大の河原石を集石状に検出した。

SP384 (第27図) E 2でSB01の東側に位置し、平面は楕円形状を呈す。また、越前焼の播鉢等が僅かに出土し、覆土上層で5～10cm大の河原石を集石状に検出した。

SP457 (第27図) E 2でSB01の南側に位置する。平面は不整な円形状を呈し、東半の肩に段をもつてやや緩やかに立ち上がる。また、底面付近で木製品の曲物の底板を検出した。

SP647 (第27図) E 3でSB03の南東に位置し、平面は楕円形状を呈す。また、土師質皿、越前焼播鉢、石製品の行火等が少量出土し、10～20cm大の河原石を集石状に検出した。

SP833 (第27図) D 4でSE12～14の北西に位置し、平面は楕円形状を呈す。また、石製品の行火や五輪塔水輪が僅かに出土した。

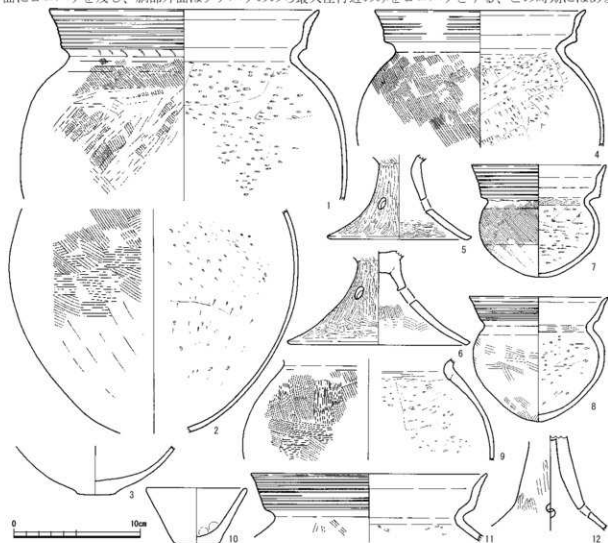
第5章 遺物

今回の調査では古式土師器と中世の土器・陶磁器が遺物の多くを占め、一部小さな破片だけであるが古墳時代後期の須恵器等も出土した。古式土師器と中世遺物については遺構出土のものを中心に図化した。中世遺物については井戸に利用された曲物などの木製品と石製品もある。

第1節 古式土師器 (第28図～第32図)

SE10からは甕口縁部、高坏脚上半部、鉢の3点を図化した(第28図10～12)。甕は擬凹線文のある有段口縁で、口径が18cmほどの中型品(第28図11)である。高坏(第28図12)は裾が「ハ」字状にゆるく外反する。鉢(第28図10)は平底から指押さえて直線的に伸びて、口縁端部となる小型品である。

SK13からは甕4点、壺1点、高坏・器台2点、鉢2点の9点を図化した(第28図1～9)。甕は口縁部があるのは2点で擬凹線文のある有段口縁で、口径が20cmを超える大型品(第28図1)と17cmほどの中型品(第28図4)である。胴部下半部しか図化できなかった(第28図2)は縦長の胴部で底部は、この時期にある不安定な小さな平底であろう。口縁部はないが頸部から胴部上半までのもの(第28図9)は、頸部内面にヨコハクを残し、胴部外面はタテハクののち最大径付近のみをヨコハクとする、この時期にはあま

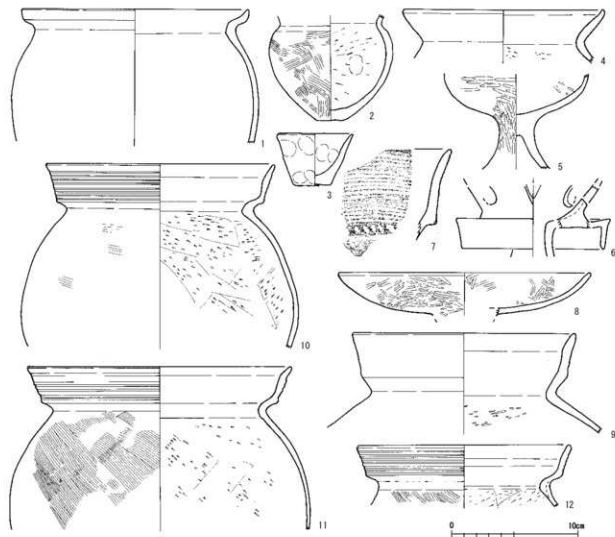


第28図 井戸・土坑出土古式土師器実測図(縮尺1/3)

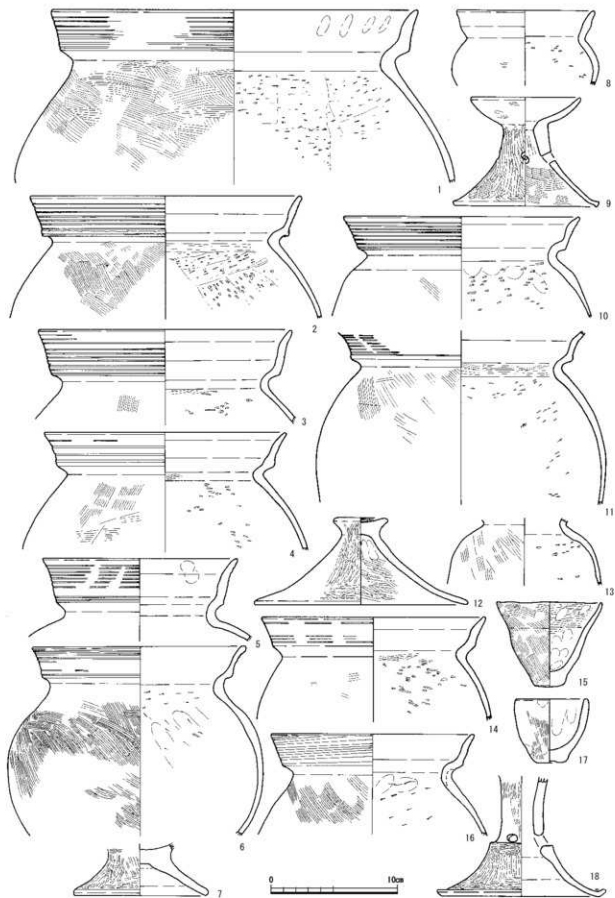
り見られないハケ調整である。不整形で歪な平底の底部(第28図3)は、内外面ともにナダ調整で壺の底部と判断した。脚部の上端がふさがれたもの(第28図6)を高坏の、塞がれていないもの(第28図5)を器台の脚部と判断した。鉢は擬凹線文のある有段口縁で、口径が11cm前後、胴部の最大径もこれと同じ(第28図8)か、やや小さい(第28図7)。いずれも頸部内面にヨコハケを残す。

SP93では台付壺の胴部下半と脚部上半と考えられるもの(第29図5)を図化した。胴部をヨコミガキ、脚部はタテミガキとする。SP271では口縁部上端を擴まみ上げた畿内庄内式の影響を受けた「く」の字襷(第29図4)がある。SP364では垂下帯を欠く受け部と立ち上りを一部残す裝飾器台(第29図6)を図化した。SP860では甕と鉢の3点を図化した。甕は北陸特有の有段口縁ではなく、擬凹線文が施文されない立ち上がりの短いもの(第29図1)で、近江の受口状口縁に近い。鉢は指押さえ成形の小型のもの(第29図3)と、屈曲する頸部の上を欠く甕に近い器形のもの(第29図2)である。SP898では、緩やかに外反する立ち上がりの有段口縁で擬凹線文の下の立ち上がりに刺突列点を加える壺の口縁(第29図7)と、高坏の皿状の坏部のみ(第29図8)を図化した。

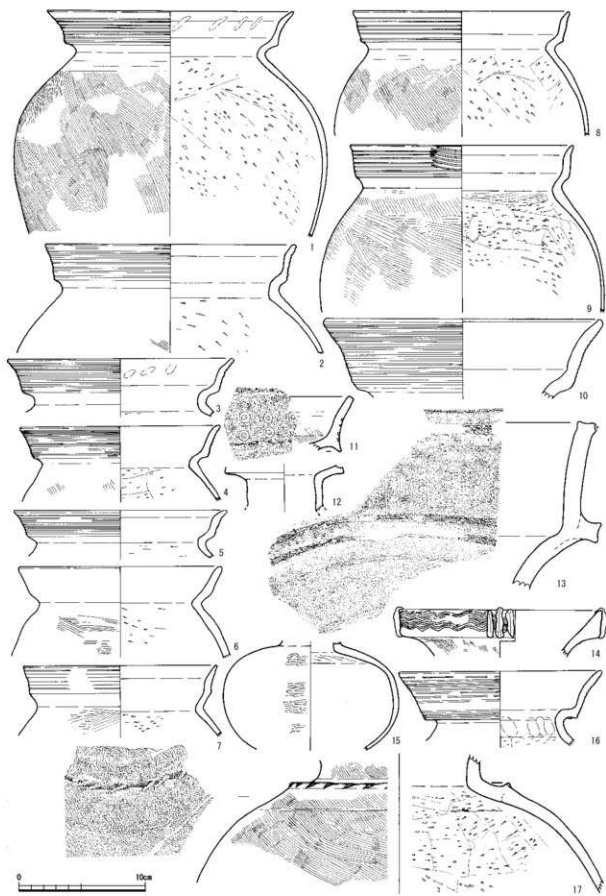
SD02では有段が弱い壺の口縁(第29図9)を図化した。擬凹線文の施文はない。SD05では擬凹線文を施文する有段口縁の甕3点を図化した。いずれも口縁部が外反するが、口縁端部が先細りするもの(第29図10・11)と、丸く終わるもの(第29図12)である。SD08では甕9点、壺3点、高坏・器台2点、蓋1点、



第29図 ビット・溝出土古式土師器実測図(縮尺1/3)



第30圖 漢出土古式土師器實測圖(縮尺1/3)

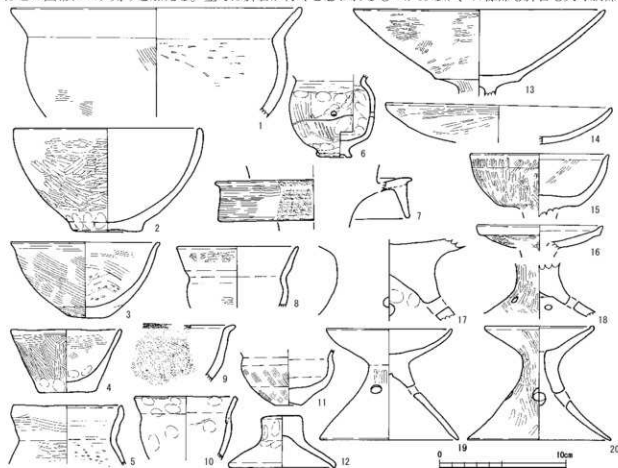


第31圖 包含層出土古式土師器実測圖1 (縮尺1/3)

鉢3点の計18点を図化した。甕はいずれも擬凹線文を施文する有段口縁で、口縁が外反し先細りするものがほとんどである。口径は30cm近い大型のもの(第30図1)以外は、20cmを超えるものから16cmの中型のもの(第30図2～4・6・10・11・14・16)で、口径が16cmより小さいもの(第30図5)は頸部以下の胴部が大きく開きそうで有段口縁でも壺である可能性が高い。口縁部のある壺は図化できなかったが、胴部上半と思われるもの(第30図13)と、壺の脚台と考えられるもの(第30図7)がある。高環・器台については小型器台(第30図9)が1点、有段脚で大きさや脚部上半の開きから器台と考えられるもの(第30図18)の2点である。蓋は内外面ともミガキ調整の笠状のもの(第30図12)1点が全体を図化できた。鉢は口縁が弱い有段となる無文のもの(第30図8)と小型のもの2点である。後者には開く口縁部が僅かに屈曲するもの(第30図15)と、胴部からそのまま口縁となるもの(第30図17)がある。外面はタテハケである。

包含層出土についてはやや特殊なものや、遺構出土では見られなかったもの他に、器形が良くわかるものなど甕9点、壺8点、高環・器台9点、蓋1点、鉢10点の計37点を図化した。

甕は口径が20cm弱のやや大型のもの(第31図1～3・9)と、16cm前後の中型のもの(第31図4～8)があり、後者は有段が不明瞭で無文のもの1点(第31図6)以外はすべて擬凹線文が施文される。壺は有段で擬凹線を施文するもの(第31図10・16)、有段で立ち上がる口縁帯に円形竹管を2段に巡らせるもの(第31図11)、大型で口縁帯下端にタガ状の凸帯を貼り付け巡らせるもの(第31図13)、幅広の口縁外面に櫛描波状文を巡らせて3本の棒状浮文を貼り付けるもの(第31図14)などバラエティーに富んでいる。筒状の頸部(第31図12)は二重口縁であろう。この時期の壺に多い頸部に凸帯を貼り付けるもの(第31図17)はこの凸帯にヘラ刻みを加える。壺では脚台が付くと思われるものがあるが、口縁部も脚台も欠く胴部



第32図 包含層出土古式土師器実測図2(縮尺1/3)

のみのもの(第32図15)もある。高坏はわずかにゆるく内湾する坏部(第32図13)と、皿状の坏部(第32図14)、小さな椀状の坏部(第32図15)の3点で、いずれも外来の系譜と考えられ北陸在地の典型的なものとは図化できなかった。後者は大きく開く脚部(第32図18)が付くと思われるが、色調などから同一個体ではないようである。坏部と脚部の接合部分のみ図化できたもの(第32図17)は、どのタイプの高坏か不明である。器には小型のものしかなく、口縁端部を丸くするもの(第32図19)、端部を上に乗み上げるもの(第32図20)、外に面をつくるもの(第32図16)の3点である。装飾器部は垂下帯の部分1点(第32図7)しか図化できなかった。鉢には大きさも形も様々なものがある。口縁部が屈曲するものには口径が20cmを大きく越えるもの(第32図1)、10cm以下の口縁部がヨコミガキのもの(第32図8)、指押さえて成形するもの(第32図10)の3点である。口縁への立ち上がりが内湾する鉢には、口縁端部をそのまま丸く終わるもの(第32図2)、わずかに外反させるもの(第32図3)、摘み出して外反させるもの(第32図9)3点で、平底から直線的に外傾するもの(第32図4)はそのまま口縁部とする。小型の土器には頸部がわずかに屈曲し、口径が胴部とほぼおなじもの(第32図10)がある。さらにいずれも口縁部を欠失するが、縦長の胴部(第32図6)と横長の胴部(第32図11)があり、前者は底部に粘土紐を高台状に貼り付け、後者は上げ底としている。この他に口縁部が長めで鉢ではなく壺に分類すべきかと思うもの(第32図5)もある。蓋は径8cmほどの壺に伴う小型のもの(第32図12)しか図化できなかった。

第1表 古式土器観察表

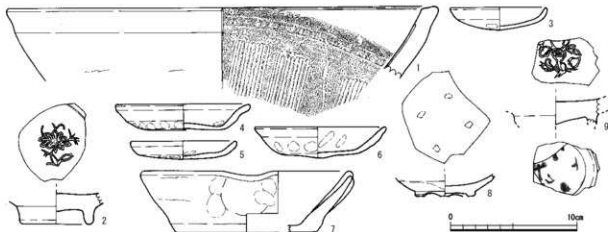
図録番号	図種	器位	出土地点	口径 (cm)		高さ	径深	色調	粘土	装飾技法・文様	備考
				口縁	器底						
第28図1	壺	口縁～胴部上	9K13	121.0	115.0	-	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量) ④ 外1口縁部縁部多量 ⑤ 胴部上縁部(多量)	外1口縁部縁部	
第28図2	壺	胴部上	9K13	-	172.0	-	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量)	外1口縁部縁部	
第28図3	壺	底	9K13	-	13.0	13.0	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量)	外1口縁部縁部	
第28図4	壺	口縁～胴部上	9K13	116.0	116.0	-	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量)	外1口縁部縁部	
第28図5	鉢	口縁	9K12	-	86.7	11.9	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量)	外1口縁部縁部	
第28図6	鉢	口縁	9K13	-	17.0	14.0	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量)	外1口縁部縁部	
第28図7	鉢	口縁～胴部上	9K12	18.8	8.9	1.8	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量)	外1口縁部縁部	
第28図8	鉢	口縁～胴部上	9K13	11.1	9.9	-	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量)	外1口縁部縁部	
第28図9	壺	口縁～胴部上	9K13	9K13	-	18.0	-	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量)	外1口縁部縁部
第28図10	小口壺	口縁～胴部上	9K13	7.0	4.4	12.0	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量)	手取	
第28図11	高坏	口縁～胴部上	9K10	116.0	115.0	-	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量)	手取	
第28図12	高坏	口縁～胴部上	9K10	-	17.0	-	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量)	4.8	
第28図13	鉢	口縁～胴部上	9K10	116.0	116.0	-	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量)	手取	
第28図14	鉢	口縁～胴部上	9K10	116.0	116.0	-	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量)	手取	
第28図15	鉢	口縁～胴部上	9K10	116.0	116.0	-	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量)	手取	
第28図16	壺	口縁～胴部上	9K13	115.0	112.0	-	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量)	手取	
第28図17	壺	口縁～胴部上	9K13	115.0	112.0	-	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量)	手取	
第28図18	壺	口縁～胴部上	9K13	115.0	112.0	-	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量)	手取	
第28図19	壺	口縁～胴部上	9K13	115.0	112.0	-	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量)	手取	
第28図20	壺	口縁～胴部上	9K13	115.0	112.0	-	丸	赤	① 外1口縁部縁部多量 ② 口縁下部(丸縁) ③ 胴部上縁部(多量)	手取	

第2節 中世の土器・陶磁器 (第33図～第39図)

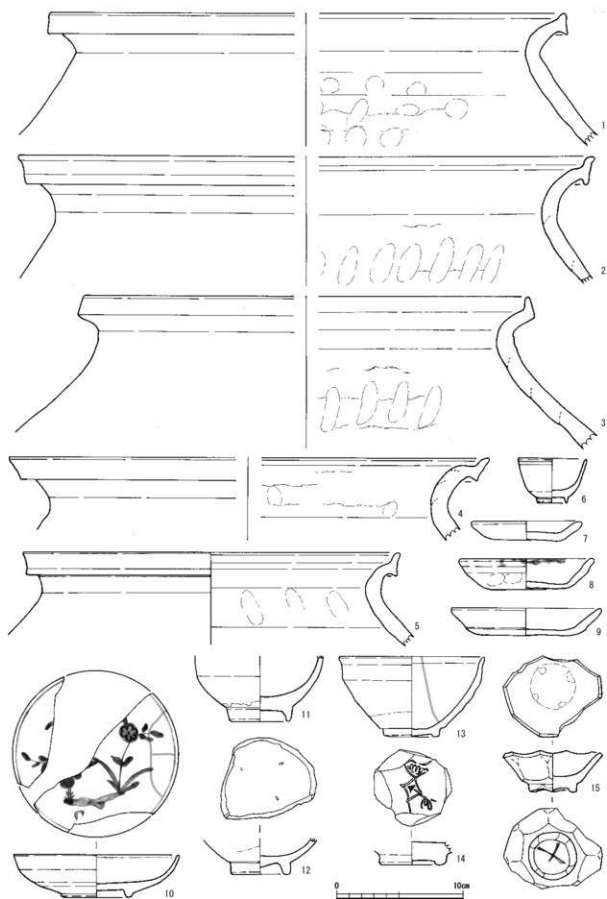
SB01-P10 (SP137)からは土師質皿(第33図3)を、SB01-P18 (SP303)からは越前焼の播鉢の口縁部(第33図1)と青磁碗の高台(第33図2)を図化した。SB02-P08 (SP556)からは土師質皿2点(第33図4・6)、SB02-P20 (SP565)からは土師質皿(第33図5)、SB02-P12 (SP360)からは越前焼の播鉢(第35図3)を図化した。この破片はSB02の柱穴ではないが、付近のSP384から出土した破片と接合し、SP388から出土した破片も同一個体と考えられる。SB03-P16 (SP562)からは口径が小さく器高も低い越前焼の片口鉢(第33図7)を図化した。SB04-P03 (SP960)からは青磁碗の高台(第33図9)、SB04-P07 (SP34)からは軟質で挟り高台の白磁皿(第33図8)を図化した。SA01-P01 (SP47)からは越前焼播鉢の口縁部(第35図2)を図化した。

SP18からは青磁碗の口縁部(第35図6)を図化した。SP28からは瀬戸・美濃産の天目茶碗の底部(第34図12)と伊万里染付の猪口(第34図6)を図化した。前者は赤く砂粒状の特徴的な胎土である。後者は口縁に2条の、高台に1条の線が入る。SP63からは伊万里染付の皿(第34図10)を図化した。3つの破片を接ぎ合わせた漆膜が残されている。SP226からは白磁の八角坏(第34図15)を図化した。挟り高台の内側には「✱」の薄い墨書が残る。SP256からは灰釉瓶子の胴部(第35図1)と珠洲焼甕の頸部付近(第35図8)を図化した。甕の同じような部分の珠洲焼がSP746からも出土している(第35図7)。SP365からは青磁碗の高台(第34図14)を図化した。高台部分を中心に円形に打ち欠き転用している可能性が高い。SP388からは越前焼の播鉢(第35図3)を図化した。SP492からは土師器鍋(第35図5)を図化した。同じ個体と考えられる破片がSE01とSK11からも出土している。SP525からは土師質皿(第34図9)を図化した。底近くまでユビナデしている。SP605からは土師質皿(第34図8)を図化した。SP820からは口縁部を欠く天目茶碗(第34図11)を図化した。SP833からは土師質皿(第34図7)を図化した。SP926からは天目茶碗(第34図13)を図化した。1/3に割れたのを漆接ぎして完形としている。越前焼甕の口縁部片をSP228(第34図1)、SP732(第34図3)、SP740(第34図2)、SP227(第34図5)、SP881(第34図4)から1点ずつ図化した。SP881からは灰釉の卸皿(第35図4)も出土し、SP763から出土した破片と接合した。

SE08からは剣頭が連弁の単位を意識しない簡略化された筆書き鎮連弁の青磁碗(第36図7)、漆接ぎが残る天目茶碗(第36図6)と中型の土師質皿(第36図8)を図化した。土師質皿は口縁端部をわずかに狭まみ上げる。SE09からは外面に鎮連弁の一部が見える青磁碗(第35図9)と、中型の土師質皿(第36図3)を図化した。見込み全体をユビナデし、底に指押さえを残す。SE10からは底部が糸切りと思われる山茶碗



第33図 建物柱穴内出土中世土器・陶磁器実測図(縮尺1/3)

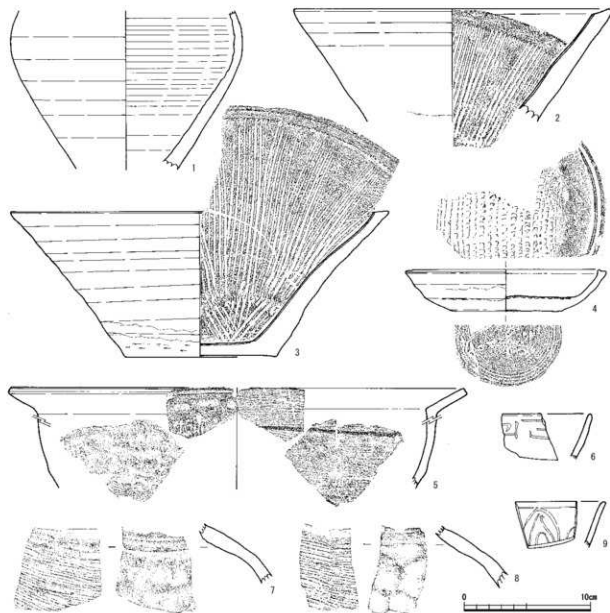


第34図 ビット出土中世土器・陶磁器実測図(縮尺1/3)

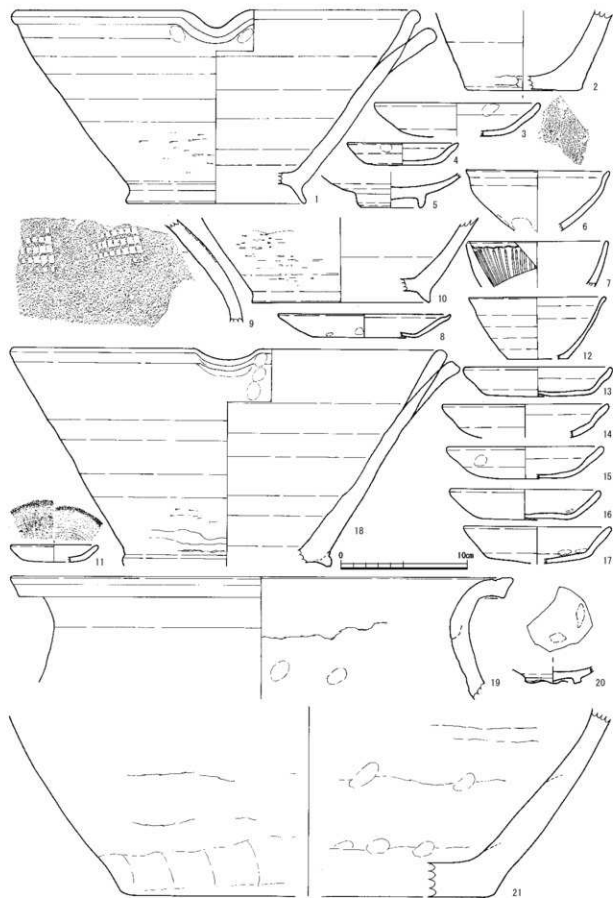
系の平底碗(第36図12)と中型の土師質皿5点を図化した。後者には見込み中ほどまでしかユビナデしないもの(第36図13~16)と、底近くまでユビナデするもの(第36図17)の2種類ある。SE18からは越前焼甕の底部(第36図21)と白磁皿の挟り高台(第36図20)を図化した。SE24からはSD01と接合した越前焼甕の肩部片(第36図9)、越前焼片口鉢の底部(第36図10)と小型の土師質皿(第36図11)を図化した。越前焼甕には格子目の押印文がある。

SK02からは青磁碗の高台(第36図5)と、小型の土師質皿(第36図4)を図化した。SK06からは越前焼片口鉢(第36図1)と珠洲焼壺の底部(第36図2)を図化した。片口鉢の高台は薄く長く伸びる。後者の底部は糸切りで珠洲焼特有の海綿骨針が含まれる。SK15からは越前焼片口鉢(第36図18)と甕の口縁部(第36図19)を図化した。

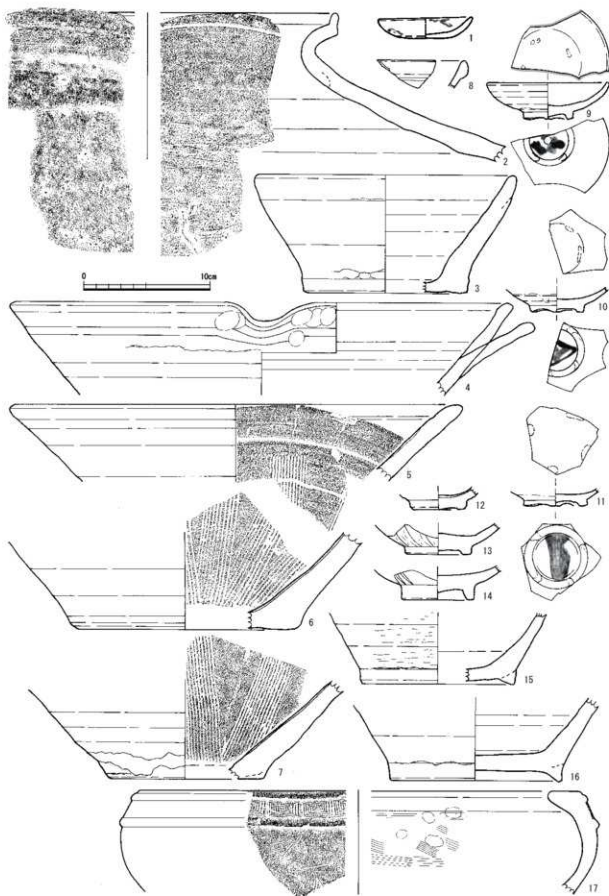
SD01からは越前焼の甕口縁部(第37図2)、捏鉢(第37図3)、片口鉢(第37図4)、挿鉢の口縁部(第37図5)と底部2点(第37図6・7)、白磁皿の底部(第37図10)、青磁碗の高台2点(第37図13・14)、土師



第35図 ビット・井戸出土中世土器・陶磁器実測図(縮尺1/3)

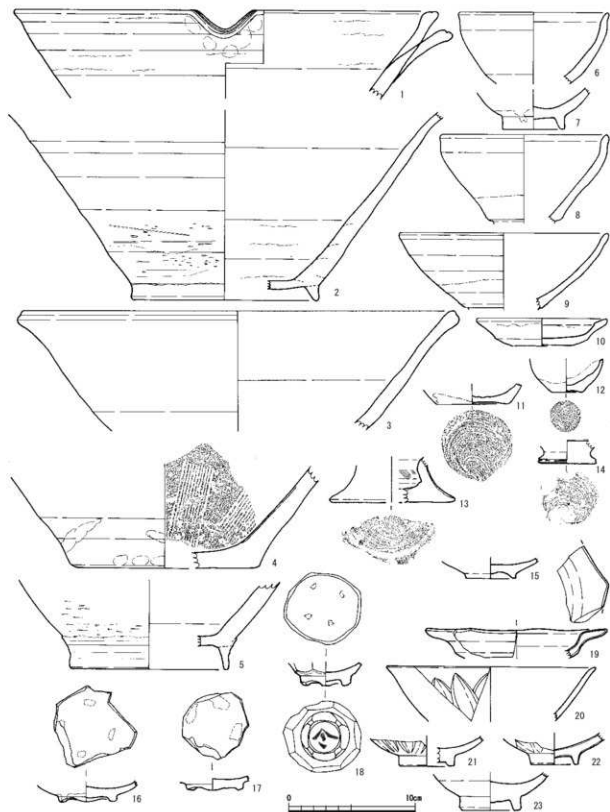


第36図 井戸・土坑出土中世土器・陶磁器実測図(縮尺1/3)

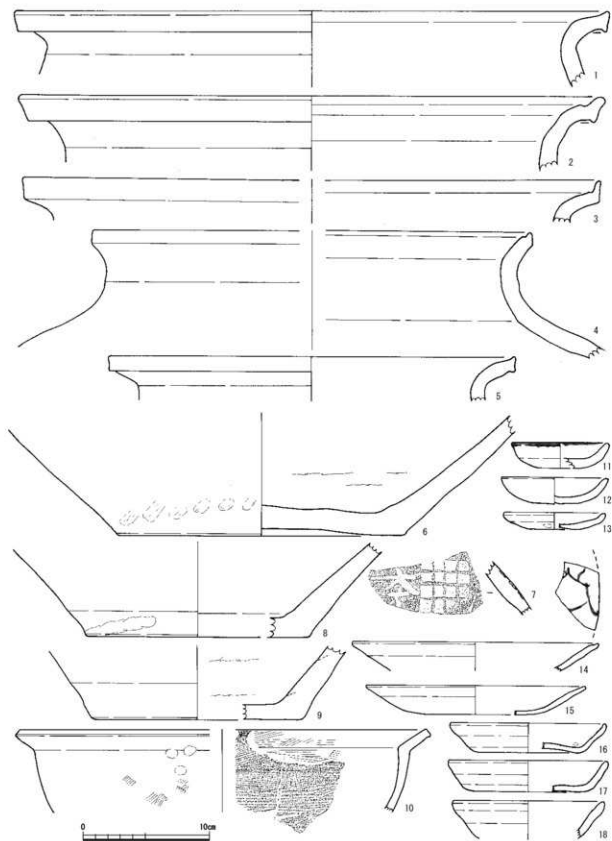


第37図 清出土中世土器・陶磁器実測図(縮尺1/3)

質皿(第37図1)の計10点を図化した。SD02からは天目茶碗の高台(第37図12)、白磁は皿(第37図9)、玉縁口縁部片(第37図8)と高台(第37図11)の計4点を図化した。図上で完形となっている白磁皿(第37図9)には破損した断面2か所と底部高台内側に、漆接ぎの膜が残されている。SD03からは瓦質の鉢(第37



第38図 包含層出土中世土器・陶磁器実測図1(縮尺1/3)



第39図 包含層出土中世土器・陶磁器実測図2 (縮尺1/4)

図17)を図化した。口縁に2条の凸帯を巡らせ、その間に方形を5個箱重ねし「×」を加えたスタンプ文様を充填する。SD05からは越前焼の片口鉢2点(第37図15・16)を図化した。

包含層出土のものは越前焼では甕の口縁5点(第39図1～5)、底部3点(第39図6・8・9)、片口鉢4点(第38図1～3・5)に描鉢(第38図4)を図化した。甕肩部の「本」+格子目の押印文(第39図7)は大甕によくみられるものである。瀬戸・美濃産と考えられるものは天目茶碗3点(第38図6～8)の他に、碗と思われる糸切りの平底(第38図11)と小壺の底部(第38図12)を図化した。さらにこれらと同じような胎土であるが、蓋のような糸切りの底(第38図14)はその上のような胴部となるかが不明である。瀬戸は灰釉碗(第38図9)と糸切り底の皿(第38図10)と、瓶子の底部(第38図13)を図化した。青磁碗は口縁(第38図20)に高台3点(第38図21～23)、皿(第38図19)を図化した。白磁皿は挟り高台2点(第38図16・17)に角環の高台(第38図18)を図化した。後者の高台内側には朱で書かれた文字があり、「今」と考えられる。高台が小さい皿(第38図15)は朝鮮製雑釉の碗であろう。土師質皿の口径が7～8cm前後のもの3点(第39図11～13)はいずれも底部から口縁部への立ち上がり丸みのあるもので、10cmを超えるもの3点(第39図16～18)は立ち上がりが明瞭である。17cmを超える大きな口径の土師質皿が2点あるが、口縁部のみのもの(第39図14)と底部からの立ち上がりが緩く不明瞭なもの(第39図15)である。前者(第39図14)の内面には墨で模様のようなものが書かれている。この他に土師器の鍋(第39図10)の口縁部片もある。

第3節 土製品(第40図)

土製品には土錘や土製円盤、輪の羽口に、包含層からではあるが古代の瓦が出土している。

土錘(第40図1)は両面の小口を筥で平滑にした、ほぼ円筒状の陶製でSP928から出土している。土製円盤は包含層(第40図2)からと、SK02(第40図3)から出土し、色調や胎土からも越前焼の甕の破片を利用したものであろう。輪の羽口は4点確認しているが、SE01から出土した1点は破片が小さく部位が特定できないので図化していない。SE01から出土した他の1点は先端部そのものは欠くものの、径が次第に小さくなることからこれに近い部分の羽口(第40図6)と判断した。先端部が残された羽口はSD02(第40図4)と包含層(第40図5)から出土している。古代の遺物は須恵器片が出土している。須恵器意外に、内面に布目痕が残る丸瓦(第40図7)が包含層から出土している。

第4節 石製品(第40図～第42図)

石製品には砥石や暖房具、石臼、石塔類に大型容器の身と考えられる北陸の中世に特有のものや、磨石や大きな凹石など縄文時代のものと考えられるものがある。砥石以外の中世の石製品は全て凝灰岩で地元の笏谷石である。

砥石は厚みが1cm前後の薄い板状のもの3点(第40図8～10)と、2～3cm以上の厚みのあるもの2点(第40図11・12)の5点を図化した。前者は粘板岩系の、後者は凝灰岩系の石材で、1点(第40図9)がSP182から、2点(第40図8・10)は包含層出土である。擦切りによって大きく窪んだ溝があるもの(第40図10)は、剥離した裏面と小口の1方向を除く4面とも使用されている。図化していないが、溝状の擦切り痕や部分的に極端に湾曲するまで使用されたものもある。厚みのある2点は、1点(第40図11)がSD04から、1点(第40図12)がSE09からの出土である。長方体の両小口面は割れたままで摩擦するように使用されており、本来の金属器の砥石としての使用以外に何らかの使用が考えられる。小口以外の4

面、特に幅の広い面は大きく湾曲するまで使用されている。

石皿(第41図6)は、SD02から磨石(第40図13)と縄文晩期の土器(第49図1)が出土していることから、中世ではなく縄文時代のもと考えられる。

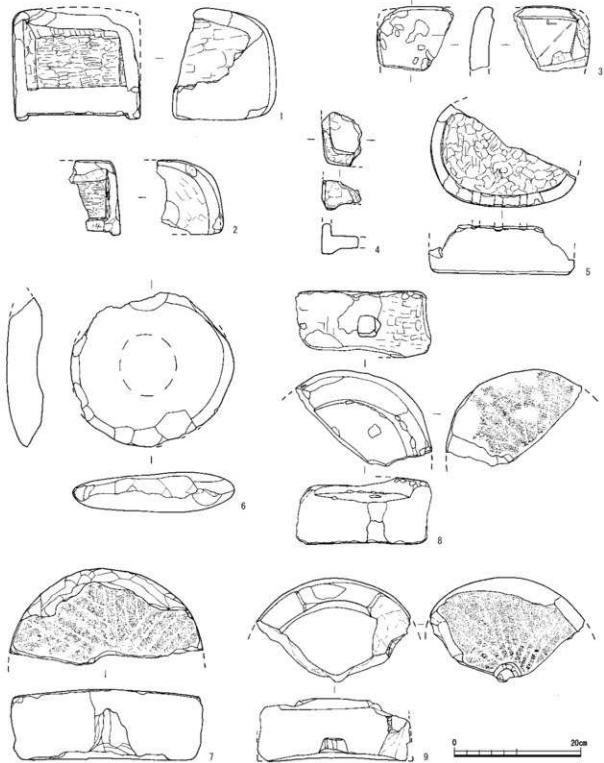
暖房具は越前の中世に特有のものである手焙と行火がある。手焙は一側面の全面を窓とするもの(第41図1)がSP833から、手焙の右側面後ろ部分(第41図2)が包含層から、左右どちらかは不明ながら底の脚の部分のもの(第41図4)はSP43から出土した。行火は平面形がD字の蓋の左後ろ隅の部分(第41図3)がSB02-P12(SP360)から、楕円形の身の底半分(第41図5)がSP647から出土した。後者は側面の窓の格子部分の割れた面を整え、再利用している可能性が高い。これら5点の暖房具はいずれも内外面に打ち欠きなどがあり、廃棄時または廃棄後によるものではなく、使用時にできた可能性がある。手焙の脚(第41図1)や楕円形行火の底(第41図5)なども著しく摩滅している。

石臼は上臼に下臼との軸を受ける穴が残されていないもの(第41図8)がSD01から、穴の部分を確認で

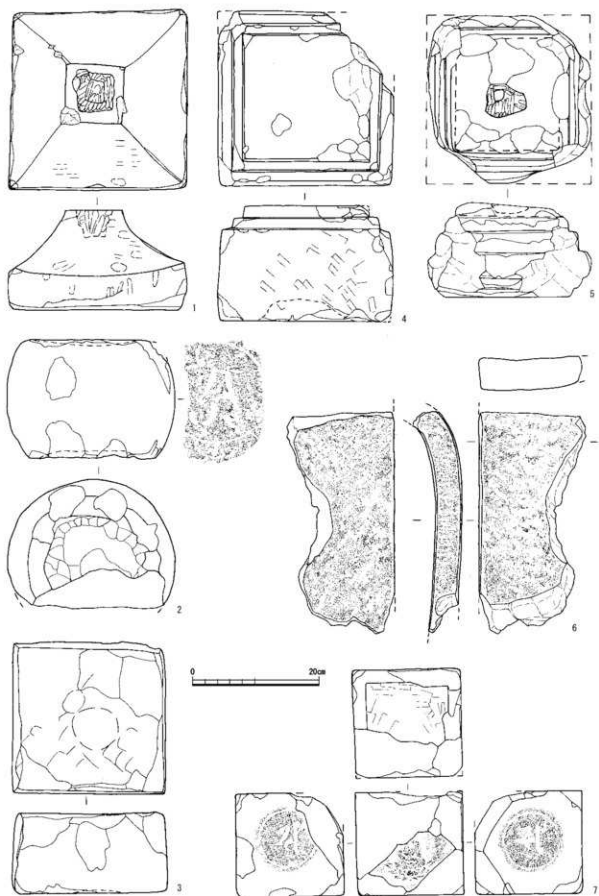


第40図 土製品・石製品実測図(縮尺1/3)

きるもの(第41図9)がSP70から出土している。前者の上臼側面には引いてまわす際に使用する把手を差し込む穴がある。下臼は軸の穴が上に貫通していないもの(第41図7)がSE08から出土しているが、欠損した半分の上に貫通した穴があったと考えられる。この他に大型容器の上側面と考えられる破片1点(第42図6)がSP38から出土した。直線部があることから平面形は楕円であったと考えられるが、底の部分がなく深さは不明である。石塔類は宝篋院塔の笠(第42図5)がSD01から、同じくその基礎(第42図4)



第41図 石製品実測図1(縮尺1/6)



第42図 石製品実測図2(縮尺1/6)

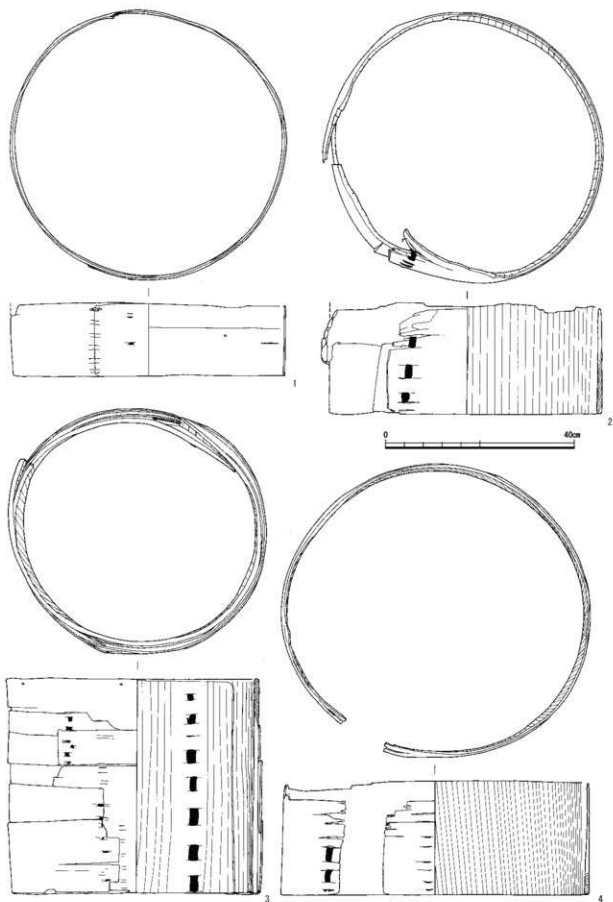
がSB01-P01(SP152)から、塔身(第42図7)が包含層から出土している。組合せ五輪塔は火輪(第42図1)がSP681から、水輪(第42図2)と地輪(第42図3)が包含層から出土している。組合せ五輪塔は大きさから1組の可能性が高いが、宝篋印塔は笠と基礎の大きさは合うが、塔身がそれらよりも1から2廻りほど小さく別個体と考えられる。塔身の上面は方形に掘り込まれて低くなっている。梵字は五輪塔には水輪の一面のみに、宝篋印塔は塔身の三面にあるが、どちらも梵字を囲む月輪が連弁の表現ではなく、前者は細い線刻で、後者は溝を周りから掘り込んでいる。その下に蓮華座などの表現はなく、この点では古い様相を示すものではない。五輪塔の火輪と地輪の表面には大きな破損部分はみられないが、水輪は梵字を中心とした半分が残るように打ち欠かされている。宝篋印塔は基礎の四隅の1箇所が大きく、もう1箇所は小さく打ちかれ、笠に至っては四方向の隅飾り全てが打ち欠かれて残されていない。別個体と思われる塔身も2箇所の梵字面が打ち欠かれたような状況である。行火などの暖房具の生活用品と比較して、表面が荒れた状況はみられないのに対して、梵字の部分や屋根の隅飾り部分などの象徴的な部分の欠失などから意図的な損壊があったように考えられる。その一方で、行火などの生活用品が著しく摩滅していることは、かなり長期間に使用されたことを示していると考えられる。

第5節 木製品 (第43図～第46図)

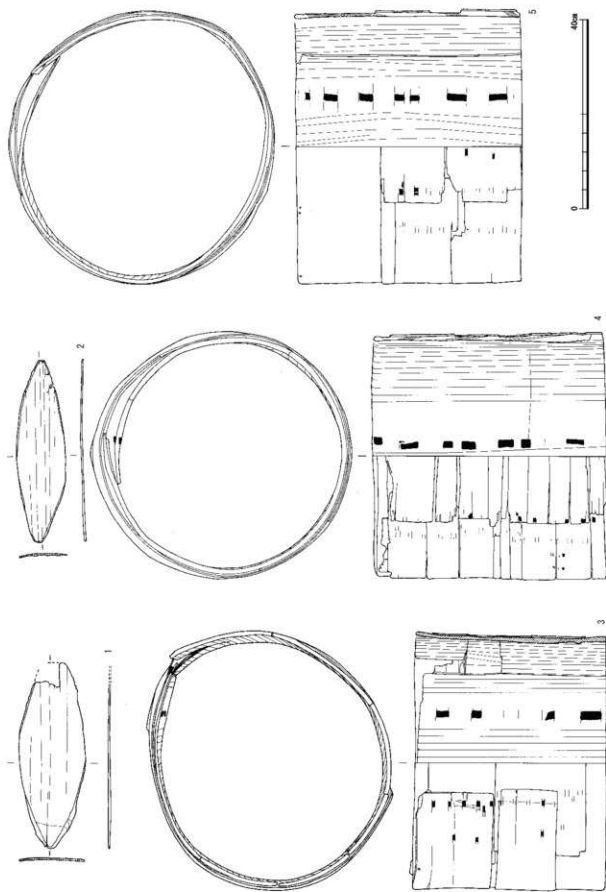
木製品には曲物、その底板かまたはそれに類似する円板状の板、漆器、鋏、下駄、容器等の脚、用途不明の笹葉状木製品など多種ある。曲物には底板の径から大型、中型、小型の3種類があり、井戸に転用された径40cm以上の大型のもの7点(第43図1～4、第44図3～5)、径25cm前後の中型のもの1点(第45図1)、径16cm前後の小型のもの1点(第46図1)の計9点を図化した。SE09に転用された曲物は上三段に径55～60cmほどのやや大型のもの(第43図1・2・4)、最下段に径51cmほどのもの(第43図3)を用いている。非常に薄い板で内側にケビキを入れないもの(第43図1)は6箇所1列と間をあけて2箇所1列で綴っている。これよりやや厚手の板(第43図2)に多数のケビキを入れているものは、4または5箇所1列で綴る。樫綴じが3箇所残るもの(第43図4)は他にも幾つか切り込みがあり、やはり4または5箇所綴っていたと思われるが、現状では外れて接合していない。最下段のもの(第43図3)は口径は小さいが、厚み1cmほどの最も厚い板を用いて内側にケビキを多数入れた本体の外側に3枚の薄い板を重ねて、本体の綴りと反対側でそれぞれを綴っている。SE24に転用された曲物は五段重ねられていたが、上の二段は取り上げられなかったため図化していない。中段のもの(第44図3)、下段のもの(第44図4)、最下段のもの(第44図5)の3点とも、8～10mmほどのやや厚めの板材の板目に垂直にケビキを入れて円くし、最下段と下段の器高が高いものは1列7段で、中段の低いものは1列5段で樫綴じをする。そしていずれも外側に2・3mmの幅が狭く薄い板材を2枚(最下段と中段)、または4・5枚(下段)を巻きつけて、2列もしくは1列で樫綴じする。さらにこの2枚の板の間へ縦に1・2mmの薄い板材を部分的に挟んで補強する。

井戸に転用された大型の曲物の底板、または蓋と思われるものは出土していない。

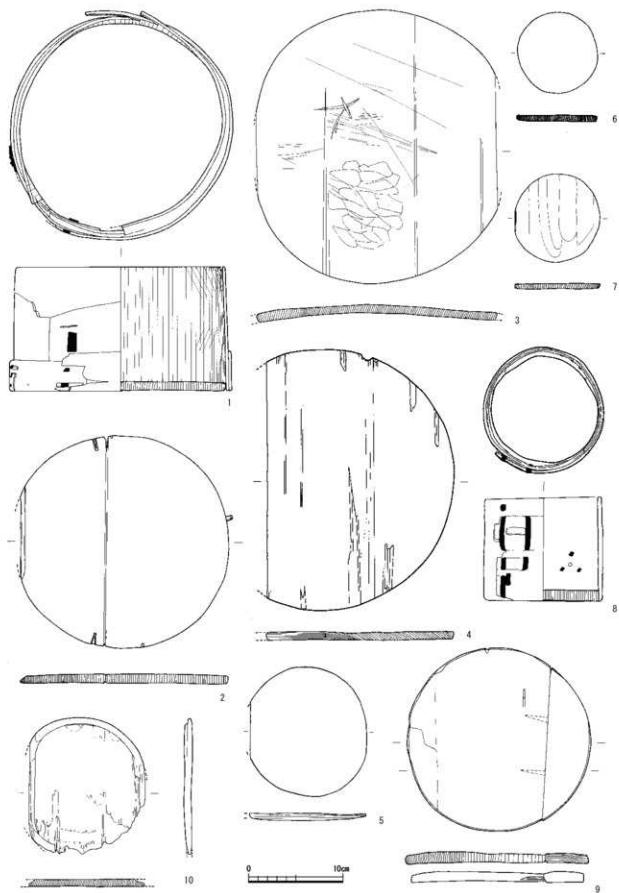
中型の曲物の側板はSE23から出土した1点のみ(第45図1)で、当初重なっていた「打ち合わせ」は、保存処理時に外れてしまった。「打ち合わせ」の上下両端の角を落とす「キメカキ」で、綴じ方は樫綴じが縁に及ばない「内綴じ」のようである。底と思われる下辺に径5mm弱の半円形の切り込みが3箇所に残る。2箇所の「釘穴」と、1箇所に木釘そのものが残り、側板の径と同じような径の底板(第45図2)があり、先の側板と一体となる曲物と考えられる。SE23にはこの中型の曲物の径よりやや大きい径30cmほどに復元



第43図 木製品実測図1 (縮尺1/8)



第44図 木製品実測図2(縮尺1/8)

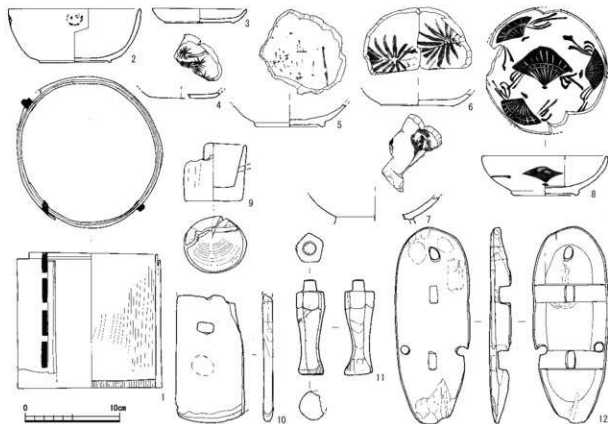


第45図 木製品実測図3 (縮尺1/4)

できる円形の板が2点あり、両端(第45図3)、もしくは片側(第45図4)が欠損している。これらの他に径が14cm前後の円形の板(第45図5)もあるが、これには木釘もしくは「釘穴」はみられない。さらに長方形の板の四方のうち短辺と長辺の2方向が残るもの(第46図10)も出土しているが、長方形に開けられた穴が板の目や板の軸に斜めとなっていることから用途は不明である。長辺は板目に沿ってきれいに割られ、残る短辺も円くする加工が明瞭である。

井戸からの出土ではないが、この他にも円形の板が4点(第45図6・7・9・10)出土している。SP827(第45図7)とSP851(第45図6)から出土したのは径10cm以下の小型のもので、特に明瞭な加工痕などはなく縁も垂直である。SP919からは大小2枚の板を2箇所の木釘で1枚の径20cm弱の円形にした板(第45図9)が出土しているが、縁は垂直である。包含層出土で全体の残りは良くないが、円形板の縁を6～9mmほど低くしたもの(第45図10)は曲物、または円形の容器の底と考えられる。これらも曲物の底板であれば、先に井戸に転用された大型とSE23で出土した中型のものとの間に、径30cmほどの曲物が存在したとも考えられる。

井戸に転用された曲物以外にも小型のもので残りの良好なもの2点が出土した。小型でも径が15cmを超える曲物(第46図1)が、SP242から出土している。薄い側板を二重にして3箇所で綴じられており、1箇所のみ1列4段で上が「外とじ」だが、下は欠損のため不明である。これ以外の2箇所はそれぞれ1段で綴じられている。径が12cmと小ぶりのもの(第45図8)は、底板がはまった状態でSP826から出土し、これも側板を二重にして2列4段綴じであったと考えられる。「打ち合わせ」の上辺は欠損のため不明だが、下辺は角を切り落とす「キメカキ」がなされ、内綴じである。側板と底板が密着しており、接合の状況は不明である。



第46図 木製品実測図4(縮尺1/4)

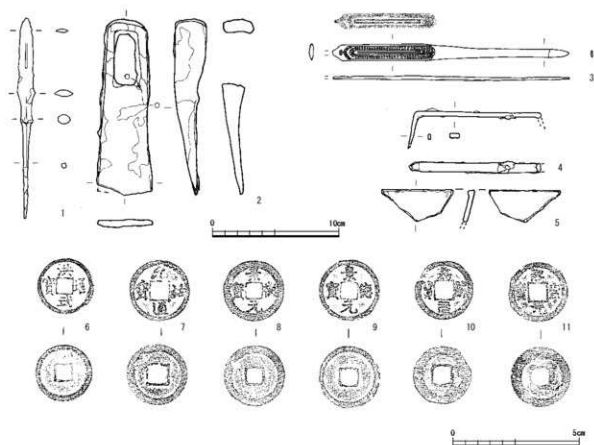
なお井戸に転用された曲物は図化していないが、SE10とSE16から用途不明の木製品として笹葉状の一枚板が1点ずつ出土している。2点とも36cmほどの長さで両方の小口を船の軸先のように細くしている。SE16のもの(第44図2)が幅9.6cm、SE10のもの(第44図1)が幅13.1cmとやや広い以外に形などに大きな違いはない。舟形を意識したのかも知れず、なんらかの井戸祭祀に関係すると考えられる。

漆椀は部分的に残された破片も含めて7点出土している。SE09から非常に薄い削り出し高台の椀底部(第46図6)が出土しており、内面には黒漆の上に赤漆でシュロの葉が描かれている。SE24から口縁の一部を欠くのみで、図化した7点の漆椀の中でも最も残りが良い高台(第46図2)は内側の削りが浅く低い。内外面ともに黒漆はよく残り、外面四方向に微かに赤漆が残るが、文様がわかるほど残りはよくない。SB01-P18(SP303)から低い削り出し高台の椀(第46図8)が出土している。口縁部の多くを欠くが文様の残りはよく、内面には大きく、側面には三方にやや小さく扇子が描かれている。SP949からは高台付近からの立ち上がりの一部分であるが、他の椀より高台が厚く高いと考えられる漆椀(第46図7)が出土している。内面の赤漆の文様は不明である。包含層からも低い削り出しの高台が僅かに残る椀の底部(第46図5)が出土し、内面に赤漆の線が残るが文様は不明である。漆皿も2点出土している。SE10からは底部片のみ(第46図4)が出土し、内外面黒漆で内面に赤漆で草葉のような文様を描く。SP752からは口縁端部が僅かに残る立ち上がりの低い皿(第46図3)が出土し、底部の縁近くを削り込んで端を僅かに高くして高台状にしている。内面は赤漆、外面は黒漆である。

容器類ではないが円形のコップ状のもの(第46図9)が、SP919から出土している。側面に高さ9mmほどの長方形と考えられる穴が斜めに開けられているが、その半分近くがなく、さらに穴のある側面と反対側の欠損部分が多いため、断定できないが把手を差し込む穴と考えられ、柄杓の桶の部分に当たると考えられる。下駄は1点(第46図12)がSA01-P01(SP47)から出土している。3箇所の鼻緒の他に、歯を装着する柄穴が前後に1か所ずつ開く差歯の露卯下駄である。このほかに包含層から何らかの足を模したものの(第46図11)が出土している。足の上には円形の柄が残り、足の断面は五角形で側面の一方向だけが突出することから、人間か獣の脚を模したものと考えられる。

第6節 金属製品・銭貨(第47図)

金属器は遺構から出土した5点を図化した。鉄鏃(第47図1)はSE08から出土し、ほぼ完存である。茎部が7cmを超え、鏃身部の下で広がる柳葉形である。手斧(第47図2)はSE20から出土し、刃先的一端を欠くが、それ以外は残りが非常に良好である。柄を差し込む穴は本体の基部の1方向を延ばして「コ」の字状に折り曲げ、反対側で接合したような痕跡がある。小型であるが非常に重く鋳造品である。斧(第47図3)はSP919から出土した。基部の端を欠くほかは残りが良い。堀窪めた内側の中央に直線を長くしたU字状凸帯の周囲に魚々子文様を施している。SA01-P06からは一端を欠くが、鏃と思われる「コ」の字状に復元できる断面が四角の鉄製品(第47図4)が出土している。現在とほぼ同じ形状である。SE24から出土した薄い鉄片(第47図5)は、縁をつぶして小さな平坦面とした鉄鍋などの口縁と考えられる。銭貨は包含層から出土した嘉祐元寶と熙寧元寶の2枚(第47図10・11)以外は、SP04から明銭の洪武通寶(第47図6)、SP717から北宋銭の元祐通寶(第47図7)、北宋銭の景德元寶がSD01(第47図8)とSD03(第47図9)から1枚ずつ出土している。



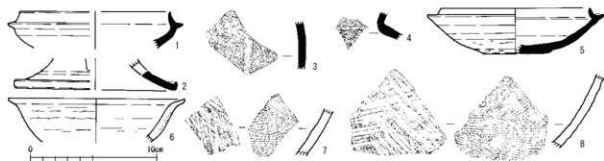
第47図 金属製品実測図(縮尺1/3: 1~4)・銭貨拓影図(縮尺2/3: 5~11)

第7節 遺構外出土の土器 (第48図・第49図)

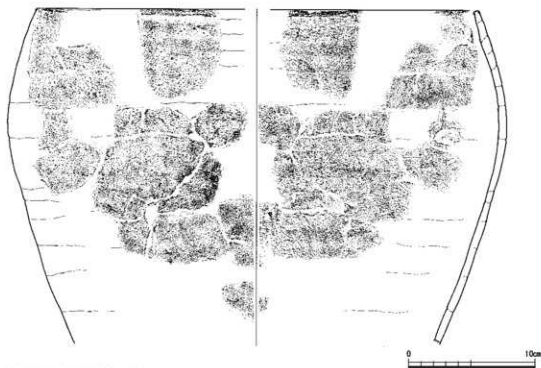
今回の調査では古墳時代初頭と中世の遺構が主で、縄文時代と古墳時代でも後期の土器が若干あるが、その他の時期の遺構は明確に確認できなかった。

古墳時代後期の土器として、この時期に古墳造営が稀な沖積地での須恵器の出土は限られており、特に集落での出土は少ない器種の破片が3点ある。應は胴部から口縁部に立ち上がった頸部に櫛描波状文の一部を残す(第48図4)。提瓶はカキ目のある胴部中央の破片(第48図3)である。残る1点は高坏の脚端部(第48図2)で、透かしの一部が確認できる。坏身はいずれも6世紀代のものであるが、やや古そうなもの(第48図1)と、新しそうなもの(第48図5)がある。これらの時期と同時期の土師器には口縁端部が開くもの(第48図6)がある。この他に甕か壺かの判断もつかない土師質の土器片が2点(第48図7・8)ある。内面はハケ調整であるが、破片が小さいためか外面はタタキとも粗いハケとも判断できない。色調は灰色だが、土師質の胎土でこれまで周辺の遺跡出土の土器には類例が見当たらない。この土器については図化のみでその位置付けについては、さらに検討したい。

縄文時代の土器として(第49図)1点がある。無文の深鉢で胴部が張り口縁部が内湾し、内外面はナデがみられる。時期は縄文時代晩期中葉と考えられる。



第48図 古墳時代の土器実測図(縮尺1/3)



第49図 縄文土器実測図(縮尺1/3)

第2表 中世土器・陶磁器観察表

標記番号	種別	器種	出土地点	寸法 (cm)			焼成	色調	胎土	備考
				口径	高さ	底径				
第33図1	甕形鉢	須弥	SR03 F18 SP303	124.0	11.8	-	白	土に灰燼	④	蓮目印文
第33図2	甕形鉢	須弥	SR03 F18 SP303	-	12.0	5.9	白	明緑灰	①	高台内：裏物 足込丸：印文
第33図3	土師質 皿	須弥	SR03 F10 SP127	7.4	1.8	6.8	白	赤ノ粒 内ノ土に灰燼	⑤	
第33図4	土師質 皿	須弥	SR02 F08 SP156	10.5	2.0	6.6	白	土に灰燼	①	
第33図5	土師質 皿	須弥	SR02 F20 SP165	8.3	1.6	7.6	白	赤ノ粒	①	
第33図6	土師質 皿	須弥	SR02 F08 SP156	10.3	2.5	6.4	白	赤ノ粒 内ノ土に灰燼	⑤	
第33図7	須弥焼 片11枚	須弥	SR02 F10 SP162	116.2	4.9	111.0	白	赤ノ裏 内ノ差物	⑥	内ノ自然釉
第33図8	白磁 皿	須弥	SR04 F07 SP14	-	11.8	4.8	白	灰白	①	盤平高台・盤部以下：裏物 足込丸：自然
第33図9	甕形鉢	須弥	SR04 F10 SP160	-	12.1	-	白	オリーブ灰	①	高台内：裏物 足込丸：印文
第34図1	須弥焼 甕	SP228	(50.4)	(10.5)	-	白	赤ノオリーブ灰 内ノ土に灰燼	④	赤ノ粒：自然釉	
第34図2	須弥焼 甕	SP749	(49.2)	(10.2)	-	白	灰燼	④		
第34図3	須弥焼 甕	SP732	(29.0)	(11.0)	-	白	灰燼	④	赤ノ粒：自然釉	
第34図4	須弥焼 甕	SP901	(28.0)	(8.5)	-	白	土に灰燼	④	赤ノ粒：自然釉	
第34図5	須弥焼 甕	SP727	(26.0)	(7.0)	-	白	磁	④	赤ノ粒：自然釉	
第34図6	染付 餅口	SP28	5.3	3.5	2.4	白	灰白	①	赤ノ口縁・腰取2条 高台・腰取1条 白	
第34図7	土師質 皿	SP633	8.9	1.6	4.2	白	磁	⑤		
第34図8	土師質 皿	SP405	(10.7)	(1.4)	5.8	白	土に灰燼	①	内ノオリーブ灰	
第34図9	土師質 皿	SP525	(12.0)	(1.1)	6.6	白	灰白	①		
第34図10	染付 餅口	SP63	13.2	3.4	5.4	白	灰白	①	腰縁印 足込丸：印文 印文	
第34図11	瀬戸灰漆 天目茶碗	SP208	-	(12.2)	4.7	白	赤ノ裏 内ノ差	①	高台以下：裏物	
第34図12	瀬戸灰漆 天目茶碗	SP28	-	(11.8)	4.8	白	赤ノ土に灰燼 内ノ差物	①	腰取以下：裏物 足込丸：自然	

練度番号	種別	設備	出上地点	距離 (m)			構成	色紙	給上	備考
				目標	最高	最低				
第13第13	親子乗馬	大月乗馬	SP426	11.6	4.3	4.4	馬	馬	(1) 遠征地 腰以下・膝輪	
第13第14	乗馬	馬	SP365	-	11.0	5.4	馬	馬	(1) 高台内・腰輪 見込み・即返文	
第14第15	白組	八角作	SP226	7.8	3.2	3.8	馬	馬	(1) 狭中高台・高台内・腰輪 見込み・即返文	
第15第1	親子	親子	SP236	-	12.2	-	馬	馬	(1) 馬ノ腰輪	
第15第2	親子乗馬	種馬	SP11 SP17	125.0	16.0	-	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪 内ノ目無自乗	
第15第3	親子乗馬	種馬	SP12 SP30	30.0	11.5	12.1	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第15第4	親子	次輪乗馬	SP763 SP801	136.0	3.3	16.0	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪 腰輪・即返文	
第15第5	親子乗馬	種馬	SP492 SP11 SP811	135.0	16.0	-	馬	馬	(1) 馬ノ腰輪 腰輪・即返文 腰輪・一部ハウ	
第15第6	乗馬	馬	SP18	-	13.4	-	馬	馬	(1) 馬ノ腰輪	
第15第7	親子乗馬	種馬	SP756	-	-	-	馬	馬	(1) 馬ノ腰輪 腰輪・即返文	
第15第8	親子乗馬	種馬	SP236	-	-	-	馬	馬	(1) 馬ノ腰輪 腰輪・即返文	
第15第9	親子乗馬	種馬	SP09	-	13.7	-	馬	馬	(1) 馬ノ腰輪	
第16第1	親子乗馬	片山組	SP06	122.0	15.0	114.0	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第16第2	親子乗馬	馬	SP06	-	16.3	15.1	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第16第3	上組乗馬	馬	SP09	133.2	2.6	17.0	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第16第4	上組乗馬	馬	SP10	116.0	2.8	16.0	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第16第5	親子乗馬	種馬	SP02	-	12.0	11.0	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第16第6	親子乗馬	大月乗馬	SP08	114.2	14.0	-	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第16第7	親子乗馬	種馬	SP08	111.0	13.0	-	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第16第8	上組乗馬	馬	SP08	113.0	1.8	16.0	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第16第9	親子乗馬	種馬	SP21 SP21	-	17.0	-	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第16第10	親子乗馬	片山組	SP24	-	16.7	11.0	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪 内ノ目無自乗	
第16第11	上組乗馬	馬	SP24	17.0	11.0	14.0	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第16第12	山車組	早志組	SP10	110.0	5.9	15.0	馬	馬	(1) 腰輪・赤組	
第16第13	上組乗馬	馬	SP10	111.0	2.3	16.0	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪 内ノ目無自乗	
第16第14	上組乗馬	馬	SP10	113.1	12.0	-	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第16第15	上組乗馬	馬	SP10	112.2	12.0	17.0	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第16第16	上組乗馬	馬	SP10	111.0	2.4	16.0	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第16第17	上組乗馬	馬	SP10	111.0	12.0	16.0	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第16第18	親子乗馬	片山組	SP15	117.0	13.0	116.1	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第16第19	親子乗馬	種馬	SP15	116.0	16.0	-	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪 内ノ目無自乗	
第16第20	白組	馬	SP18	-	11.2	11.0	馬	馬	(1) 狭中高台 腰以下・腰輪 見込み・即返文	
第16第21	親子乗馬	種馬	SP18	-	11.0	11.0	馬	馬	(1) 腰輪	
第17第1	上組乗馬	馬	SP01	7.4	1.6	3.8	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第17第2	親子乗馬	種馬	SP01	142.0	11.0	-	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪 内ノ目無自乗	
第17第3	親子乗馬	種馬	SP01	120.0	9.2	115.0	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第17第4	親子乗馬	片山組	SP01	100.0	17.0	-	馬	馬	(1) 腰輪	
第17第5	親子乗馬	種馬	SP01	136.0	16.0	-	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪 内ノ目無自乗	
第17第6	親子乗馬	種馬	SP01	-	17.7	17.1	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第17第7	親子乗馬	種馬	SP01	-	17.0	11.0	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第17第8	白組	馬	SP05	-	12.0	-	馬	馬	(1) 腰輪	
第17第9	白組	馬	SP02	19.0	2.9	11.0	馬	馬	(1) 狭中高台 遠征地 腰以下・腰輪 見込み・即返文	
第17第10	白組	馬	SP01	-	12.0	11.0	馬	馬	(1) 狭中高台 腰以下・腰輪 見込み・即返文	
第17第11	白組	馬	SP02	-	11.0	1.1	馬	馬	(1) 狭中高台 腰以下・腰輪 見込み・即返文	
第17第12	親子乗馬	大月乗馬	SP02	-	11.0	4.1	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪 内ノ目無自乗	
第17第13	乗馬	馬	SP01	-	11.0	5.0	馬	馬	(1) 馬ノ腰輪 高台内・腰輪	
第17第14	親子乗馬	種馬	SP01	-	12.7	15.0	馬	馬	(1) 馬ノ腰輪 高台内・腰輪	
第17第15	親子乗馬	片山組	SP01	-	15.7	12.2	馬	馬	(1) 高台内・腰輪 内ノ目無自乗	
第17第16	親子乗馬	片山組	SP05	-	11.0	16.0	馬	馬	(1) 高台内・腰輪	
第17第17	大月乗馬	種馬	SP05	120.0	16.1	-	馬	馬	(1) 高台内・腰輪 腰以下・腰輪 見込み・即返文	
第18第1	親子乗馬	片山組	SP10	121.0	17.0	-	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第18第2	親子乗馬	片山組	SP10	113.0	11.0	114.0	馬	馬	(1) 高台内・腰輪	
第18第3	親子乗馬	片山組	SP10	124.1	16.0	-	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第18第4	親子乗馬	種馬	SP11	-	16.1	11.0	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪 内ノ目無自乗	
第18第5	親子乗馬	片山組	SP10	-	16.0	11.0	馬	馬	(1) 高台内・腰輪	
第18第6	親子乗馬	大月乗馬	SP11	111.0	15.0	-	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第18第7	親子乗馬	大月乗馬	SP11	-	13.1	8.9	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第18第8	親子乗馬	大月乗馬	SP11 SP12 2列トレ	113.1	17.0	-	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第18第9	親子乗馬	種馬	SP11	116.0	16.0	-	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第18第10	親子	次輪乗馬	SP12	116.2	12.1	115.0	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪 内ノ目無自乗	
第18第11	親子乗馬	種馬	SP12	-	12.1	5.7	馬	馬	(1) 馬ノ腰輪 高台内・腰輪	
第18第12	親子乗馬	小巻	SP12	-	12.0	2.8	馬	馬	(1) 馬ノ腰輪 高台内・腰輪 腰以下・腰輪 見込み・即返文	
第18第13	親子	親子	SP13	-	13.0	11.0	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	
第18第14	親子乗馬	種馬	SP13	-	11.0	4.6	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪 内ノ目無自乗	
第18第15	親子乗馬	種馬	SP14	-	11.7	3.9	馬	馬	(1) 腰以下・腰輪	

第5章 遺物

探検番号	種類	器種	出土地点	遺量 (cm)			堆積	色調	船上	備考
				口徑	底高	底径				
第29図16	白磁	甌	包 30	-	11.40	4.7	白	①	餅形高弁 腰以下(露物) 見込み・白磁	
第29図17	白磁	甌	包 30	-	11.11	4.6	白	①	餅形高弁 外内ノ縁輪 見込み・白磁	
第29図18	白磁	八角弁	包 31	-	11.90	14.0	白	①	餅形高弁 高弁以下(露物) 高弁以下(露物 1号) 見込み・白磁	
第29図19	青磁	甌	包 32	13.60	12.00	-	青	①	外内ノ縁輪 八角弁	
第29図20	青磁	甌	包 34	16.40	14.30	-	青	①	外ノ縁輪	
第29図21	青磁	甌	包 34	-	12.40	14.40	青	①	外ノ縁輪	
第29図22	青磁	甌	包 34	-	12.50	13.80	青	①	外ノ縁輪	
第29図23	青磁	甌	包 32	-	12.00	13.00	青	①	高弁付高弁 高弁裏付(露物)	
第29図1	磁器類	甌	包 33	168.80	16.00	-	白	①	外ノ自然物	
第29図2	磁器類	甌	包 34	150.00	15.00	-	白	①	外ノ自然物	
第29図3	磁器類	甌	包 30	131.80	13.40	-	白	①	外ノ自然物	
第29図4	磁器類	甌	包 35	136.60	19.90	-	白	①	外ノ自然物	
第29図5	磁器類	甌	包 30 E1	122.13	13.50	-	白	①	外ノ自然物	
第29図6	磁器類	甌	包 P1 + P10	-	19.60	123.60	白	①	外ノ底ノ縁輪 縁取コシ物	
第29図7	磁器類	甌	包 34	-	14.20	-	白	①	外ノ底ノ縁輪	
第29図8	磁器類	甌	包 34 + E3	-	17.50	136.00	白	①	外ノ底ノ縁輪	
第29図9	磁器類	甌	包 32 E1	-	15.90	117.00	白	①	外ノ底ノ縁輪	
第29図10	土製陶	甌	包 32	122.13	16.50	-	白	①	外ノ口ノ縁輪 外ノ口ノ縁輪	
第29図11	土製陶	甌	包 33	17.60	3.0	14.70	白	①	外内ノ口ノ縁輪	
第29図12	土製陶	甌	包 36	18.20	2.1	12.40	白	①	外内ノ口ノ縁輪	
第29図13	土製陶	甌	包 30	18.20	1.3	12.20	白	①	外内ノ口ノ縁輪	
第29図14	土製陶	甌	包 30	19.40	12.20	-	白	①	外内ノ口ノ縁輪	
第29図15	土製陶	甌	包 P2	117.30	12.30	111.60	白	①	外内ノ口ノ縁輪	
第29図16	土製陶	甌	包 36	111.40	2.0	10.70	白	①	外ノ口ノ縁輪 外内ノ口ノ縁輪	
第29図17	土製陶	甌	包 P1	112.60	2.0	10.60	白	①	外内ノ口ノ縁輪	
第29図18	土製陶	甌	包 34	114.90	12.90	-	白	①	外内ノ口ノ縁輪	

第3表 土製品観察表

探検番号	器種	部位	出土地点	遺量 (cm)			堆積	色調	船上	調査方法	備考
				口徑	底高	底径					
第30図1	磁器類	碗底面	SP28	11.0	6.5	7.9	-	132.0	白	①	外ノ口ノ縁輪
第30図2	土製陶	甌	包 35	4.4	4.6	3.4	10.50	19	白	①	外ノ口ノ縁輪 内ノ口ノ縁輪
第30図3	土製陶	甌	包 32	4.0	4.3	3.4	22.90	19	白	①	外ノ口ノ縁輪 内ノ口ノ縁輪
第30図4	輪郭口	先施型	SP02	-	15.20	14.20	-	14	白	①	調査不明 器底のガラス質の付着物有
第30図5	輪郭口	先施型	包 32	-	13.10	14.20	-	14	白	①	調査不明 器底のガラス質の付着物有
第30図6	輪郭口	先施型	SP04	-	16.00	13.00	-	14	白	①	調査不明
第30図7	丸瓦		包 35	-	-	-	-	14	白	①	外ノ口ノ縁輪 内ノ口ノ縁輪

第4表 石製品観察表

探検番号	器種	出土地点	遺量 (cm)			堆積	色調	船上	備考
			口徑	底高	底径				
第31図8	磁石	包 33	0.50	0.20	11.00	-	28.20	①	磁石部
第31図9	磁石	SP102	4.0	2.9	0.4	-	11.20	①	磁石部
第31図10	磁石	包 31	14.70	14.00	10.00	-	17.30	①	磁石部
第31図11	磁石	SP04	8.0	5.0	3.9	-	224.5	①	磁石部
第31図12	磁石	SP09	13.1	6.3	4.8	-	142.5	①	磁石部
第31図13	磨石	SP02	11.4	10.1	7.4	-	-	-	-
第31図14	手鏡	SP03	17.6	20.0	16.5	-	-	-	-
第31図15	手鏡	包 02	11.7	7.4	9.8	-	-	-	-
第31図16	行大蓋	SP07 P12 SP360	10.2	12.1	2.0	-	-	-	-
第31図17	手鏡	SP43	8.0	6.7	4.8	-	-	-	-
第31図18	行大蓋	SP647	13.7	12.1	7.6	-	-	-	-
第31図19	磨石	包 06	25.3	24.0	5.7	-	-	-	鏡文時代の石鏡
第31図20	下付	SP06	136.20	130.20	11.20	-	-	-	-
第31図21	手鏡	SP04	16.20	12.80	10.50	-	-	-	-
第31図22	手鏡	SP20	12.00	9.8	-	-	-	-	-
第31図23	三輪船 大輪	SP01	26.7	26.3	15.0	-	-	-	鏡付三輪船
第31図24	三輪船 中輪	SP03	20.50	18.80	12.00	-	-	-	鏡付三輪船 一面に梵字
第31図25	三輪船 小輪	包 32	24.0	21.4	12.0	-	-	-	鏡付三輪船
第31図26	伊原守母章	SP01 P13 SP132	27.6	27.8	18.2	-	-	-	-
第31図27	伊原守母章	SP01	26.0	25.0	15.0	-	-	-	-
第31図28	伊原守母章	SP08	26.0	18.0	5.0	-	-	-	-
第31図29	伊原守母章	包 32	17.0	17.2	16.3	-	-	-	一面に書体印記 二面に梵字

第5表 漆器観察表

探検番号	器種	出土地点	遺量 (cm)			漆		文様		備考	
			口徑	底高	底径	内	外	内	外		
第32図2	漆器	SP14	11.0	7.6	0.2	3.7	漆	漆	赤	-	不明4
第32図3	漆器	SP132	130.00	17.40	0.1	1.5	漆	漆	赤	-	-
第32図4	漆器	包 33	-	16.60	-	16.40	漆	漆	赤	-	不明
第32図5	漆器	包 34	-	17.40	0.2	12.30	漆	漆	赤	-	不明
第32図6	漆器	SP06	-	17.70	0.1	11.40	漆	漆	赤	-	不明
第32図7	漆器	SP09	-	-	-	12.70	漆	漆	赤	-	不明
第32図8	漆器	SP01 P19 SP303	133.41	17.20	2.0	4.2	漆	漆	赤	磨損	不明

第6表 木製品観察表

群居番号	品名	出土地点	質量 (㎎)								備考
			口径	底径	高さ	最大幅	最大径	最小径	全高	重量	
第43図1	漆戸函物(上段)	SP09	-	-	52.2	34.6	6.5	-	-	114.4	私用
第43図2	漆戸函物(上段)	SP09	-	-	53.4	35.4	4.0	-	-	121.4	私用
第43図3	漆戸函物(下段)	SP09	-	-	48.4	31.2	2.0	0.9	42.8	私用	
第43図4	漆戸函物(上段)	SP09	-	-	37.8	41.0	1.0	0.1	123.4	私用	
第44図1	漆製貯木製品	SP10	-	-	36.0	13.1	6.4	-	-	-	-
第44図2	漆製貯木製品	SP10	-	-	36.1	9.8	6.3	-	-	-	-
第44図3	漆戸函物(中段)	SP21	-	-	47.6	32.7	1.5	0.7	29.2	私用	
第44図4	漆戸函物(下段)	SP21	-	-	51.6	46.5	1.7	0.8	46.5	私用	
第44図5	漆戸函物(最下段)	SP21	-	-	52.5	45.0	1.4	0.8	54.2	私用	
第45図1	漆物	SP23	-	-	25.5	23.7	8.3	-	-	13.2	-
第45図2	漆物短版	SP23	-	-	24.6	122.0	1.0	-	-	木製(漆)	-
第45図3	漆物	SP23	-	-	29.1	22.0	1.1	-	-	「天」の文字あり	-
第45図4	漆物	SP23	-	-	27.8	129.0	0.9	-	-	-	-
第45図5	漆板	SP23	-	-	12.3	112.7	0.6	-	-	-	-
第45図6	漆板	SP23	-	-	8.5	8.6	0.7	-	-	-	-
第45図7	漆物	SP27	-	-	9.0	9.4	0.6	-	-	-	-
第45図8	漆物	SP28	-	-	13.3	12.7	4.6	0.5	-	11.1	-
第45図9	漆物短版	SP19	-	-	19.5	29.4	1.2	-	-	-	-
第45図10	漆板	SP14	-	-	13.0	112.3	0.9	-	-	-	-
第46図1	漆物	SP42	-	-	16.1	11.2	1.3	0.9	-	114.0	-
第46図9	漆戸口	SP19	18.0	5.9	-	-	1.6	1.0	6.1	-	-
第46図10	漆戸	SP23	-	-	13.5	7.3	1.0	-	-	長方形1枚	-
第46図11	漆板	長 短 3列トナレ	-	-	19.1	3.0	12.9	-	-	人間土器物の群居番号なし	-
第46図12	漆戸下駄	SAP1 P01 SP47	-	-	28.8	7.9	-	-	-	7枚前後	-

第7表 金属製品観察表

群居番号	品名	出土地点	質量 (㎎)										備考				
			全長	口部長	口底幅	口底径	口底厚	口底幅	口底径	口底厚	口底幅	口底径		口底厚			
第47図1	鉄鏝	SP08	15.9	6.8	1.1	0.5	1.5	1.0	0.75	7.6	6.3	0.5	118.0	-			
第47図2	平刀	SP20	全長	全高	口部長	口底幅	口底径	口底厚	口底幅	口底径	口底厚	口底幅	口底径	口底厚	-		
			114.40	2.5	(6.7)	(1.4)	4.3	2.1	1.9	-	-	-	-	318.3	-		
第47図3	斧	SP18	全長	口底幅	口底径	口底厚	口底幅	口底径	口底厚	口底幅	口底径	口底厚	口底幅	口底径	口底厚	-	
			(15.7)	1.5	6.3	3.6	6.15	-	-	-	-	-	-	-	29.91	-	
第47図4	鋸	SAP1 P01 SP18	全長	口底幅	口底径	口底厚	口底幅	口底径	口底厚	口底幅	口底径	口底厚	口底幅	口底径	口底厚	-	
			(16.4)	2.5	6.7	3.1	-	-	-	-	-	-	-	-	15.26	-	
第47図5	鋸	口縁部	口縁部	口底径	口底厚	口底幅	口底径	口底厚	口底幅	口底径	口底厚	口底幅	口底径	口底厚	口底幅	口底径	口底厚
			-	(12.0)	6.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6.92	-

第8表 銭貨観察表

群居番号	銭文	出土地点	質量 (㎎)					材質	備考
			種	内径径	直径	厚	重		
第47図6	漢武帝帝	SP04	25.75	18.40	5.15	1.90	2.45	銅	-
第47図7	元始帝帝	SP17	21.20	26.18	6.85	1.40	2.18	銅	行書
第47図8	孝宣帝帝	SP01	24.45	17.75	5.65	1.35	2.32	銅	-
第47図9	孝宣帝帝	SP03	24.75	20.40	6.40	1.30	2.27	銅	-
第47図10	嘉祐元帝	長 短 4列トナレ	23.60	19.45	6.90	1.20	2.60	銅	篆書
第47図11	明寧元帝	長 短 6列トナレ	24.30	19.40	6.20	1.30	2.10	銅	篆書

第9表 土師器・須恵器・縄文土器観察表

群居番号	品名	部位	出土地点	質量 (㎎)				色調	胎土	調査方法・文様	備考
				口径	径高	底径	底厚				
第48図1	須恵器 罎	口縁～体部	SP 56	(12.0)	(2.9)	-	白 灰	②	内外) 同軸ナツ	-	
第48図2	須恵器 高片 群加	SAP1 P01 SP960	-	(2.4)	(13.4)	-	白 灰	②	内外) 同軸ナツ	透かし	
第48図3	須恵器 甕	体部	SP01	-	-	-	白 灰	①	内外) 同軸ナツ	-	
第48図4	須恵器 甕	体部	SP01	-	-	-	白 灰	①	内外) 同軸ナツ	-	
第48図5	須恵器 罎	口縁～底径	口 10	(11.8)	(3.0)	-	白 灰	②	内外) 同軸ナツ	同軸ハナリ文字	
第48図6	土師器 鉢	体部	SP 93	(14.0)	(3.4)	-	白 灰	②	内外) 同軸ナツ	同軸ハナリ文字	
第48図7	須恵器 甕	体部	SP 81	-	-	-	白 灰	②	内外) 同軸ナツ	同軸ハナリ文字	
第48図8	須恵器 甕	体部	SP 81	-	-	-	白 灰	②	内外) 同軸ナツ	同軸ハナリ文字	
第48図9	縄文土器	口縁～体部	SAP1	(26.0)	(26.4)	-	白 灰	③	内外)	内外) 同軸ナツ	

第6章 まとめ

1 「古式土師器」について

これまで本県では弥生時代末から古墳時代初頭にかけての土器、特に有段口縁が主体の法仏・月影式から白江式、さらに布留式までについては、明確に区分できない上にどの調査でも断続はしながらも途切れなく出土していた。そのため報告書の記述にあたっては、弥生時代後期から古墳時代前期の土器として一括して扱ってきた。その一方で石川県では、近年の調査で前方後方墳が出現する時期が白江式で、これらを古墳時代と呼ぶことが多くなっている。本県でも福井平野（広義の意味で九頭竜川と足羽川の流域）で編年の可能性がようやく出てきた。その中で今回報告する土器全てに同時代との確証はまだないものの、そのほとんどが白江式であると判断したため、ここでは敢えて「弥生時代末から古墳時代前期の土器」としないで、「古式土師器」とした。

2 中世について

本県の中世遺跡は、一乗谷朝倉氏遺跡とした「中世都市」遺跡が目ざされているが、一般的な村落遺跡の調査事例は決して多くはない。その中で調査面積は小さいながらも掘立柱建物が4棟検出された本遺跡は、普通の村落ではないと考えられる。それは鐵や鉄鍋などの鉄製品が複数出土し、青磁や白磁などの輸入陶磁器の点数も一般集落遺跡より格段に多いように思える。包含層出土で図化はしていないが、大型の青磁の皿や瓦質の風炉、捏鉢の破片は一般集落ではあまり出土例を見ない。出土遺物の総量はさほど多くないが、13世紀(第33図)から17世紀初頭(第39図)までの土器がある。包含層出土の小片で図化していないが、これまでの調査ではあまり出土例がない14世紀と考えられる越前焼敷点を確認した。この時期は教賀から坂井平野までの広い範囲が戦場となった南北朝動乱期であり、越前国内では安定した集落の形成ができなかったとも考えられる。応仁文明の乱で開始された戦国時代は15世紀末には朝倉氏が教賀まで支配下に治め、比較的安定した時代であった。その滅亡後は教賀を除く越前は一向一揆に席捲され、信長による支配からは次々と織豊系大名が入れ替わる時期であったが、本遺跡がそのような時期も継続していたのは、支配者の興亡に関わらない民衆の間わる集落遺跡であったことを示している。17世紀前半の遺構が明確でなくなるのは結城秀康の入国によって幕藩体制で安定した領国経営となり、従来とは大きく異なった交通網や集落の形成が要因とも考えられる。他の集落遺跡と比較して、出土遺物や長期間におよぶ遺跡の継続などからやや特異と考えられる本遺跡は、西側に隣接する石盛遺跡の調査で中世の石丸城跡が確認され、「(冷泉)為広能州下向日記」(=延徳二年)に記載された「クツレノ岸舟・河」の後に「城アリ、イシマル」と記載された付近である。さらに手斧状のノミ(第47図1)は一乗谷朝倉氏遺跡の西山光照寺でも出土しており、石臼の目立て具とすれば石工の存在も想定できる。つまり中世の北陸道に沿い、現在は1km以上南を流れる九頭竜川右岸(北岸)の渡渉点付近となり、商工業者などや武家などの存在が想定される町家が街道沿いに展開して立ち並んでいた一角と想定される。

3 最後に 一遺跡の立地について

細片を図化した古墳時代の須恵器(第48図1~5)については、まだ福井平野の一般集落では出土が少ない6世紀代のものである。先の石盛遺跡ではこれにやや先行する時期の集落が、南東約600mの河合寄安遺跡ではほぼ同時期の木器製作跡が確認され、さらに2km以上離れた九頭竜川左岸(南岸)の高柳遺跡でも古墳時代の須恵器が出土しており、古墳時代中期以降に川沿いに集落が進出するのが顕著になってきたことをこれまでの周囲の調査例から指摘できる。

写 真 图 版



(1) 調査区北半全景 (北より)



(2) 調査区北半全景 (西より)



(1) 調査区南半全景 (南より)



(2) 調査区東端全景 (南より)



(3) 調査区中央全景 (北東より)